503
149

290
503-149

佛蘭西 ロマン・ロラン 著
法學士 細木盛枝 譯

# 先驅者

世界思潮研究會版

內務省
警保局
圖書
ア四

大正
11. 10. 14
內交

# 譯者より讀者へ

一、本書は佛蘭西思想界の權威　ジャン・クリストフの著者として汎く知られてゐる Romain Rolland が一昨年公にした Les Précurseurs を、昨年現はれた英譯 The Forerunners によつ　、我國讀書界の爲めに譯したものであつて、これは原著者の自ら云つてゐるように、一九一五年の終から一九一九年の始まで瑞西に在つて、主として瑞西の諸雜誌に寄稿した論文を輯めたものである。そして Au-dessus de la Mêlée（戰の上にあれ）の續篇である。

一、大戰亂の暴風荒れ狂ふ歐洲の平野の中に立つ　、徹底せる平和主義の態度を持し、戰渦の上に超して、四海同胞、人類一致の信念を搖がせなかつた彼は、熱烈なる理想家で而も之の爲めに渾身の努力を捧げる奮鬪家であつて、正に來るべき新時代の先驅者であらねばならぬ。が彼がこの書中に描いてゐる先驅者は彼自身でなくて、戰亂の間に思想の自由を保ち、迫害に耐へ、來るべき人類の統一を信じた各國の（敵味方の別なく）勇者等である。

一、實に面白い書物である。私はその見界に於て著者と全然同一立場にあることはできないけれど、大戰の黑雲天を掩ふた時一脈の陽光雲間を破つて輝くのを見るは實に愉快である。私は胸を躍らせて讀んだ。殆んど初頁より終まで卷を措く能はず一氣に讀み了つた。然し概して飜譯書は譯者が原著より受けた程の感銘を讀者に與へることは困難である。況して私の文字通りの拙譯、原著の眞摯な情熱を傳へ得ないことを遺憾とする。然し原文は一字一句も省略しなかつたことをお斷りしておく。

一、原著の脚註のうち、我々にはさまで必要でないと思はるゝものは省いたが、それが爲めに本書の旨意を損じるようなことはないと信じておる。

一、本文中文字の代りに點線を施してある箇所は其の筋の注意により抹消したものである。

一九二一年三月廿三日夜・

譯者

世界人類の
新信仰の殉教者達
の記念の爲めに

殘忍なる愚蒙と
殺人的不正の犧牲者
これ等を殺したる
人々の解放者
ジヤン・ジョレー
カール・リーブクネヒト、ローザ・ルキセンブルグ
クルト・アイスナー、グスターブ・ランダウエル
に

一九一九年八月

ロマン・ローラン

# 序

本書は『爭の上にあれ』の續篇である。そして一九一五年から一九一九年の始までに瑞西國に於て書き發表した幾篇かの文章を集めたものである。この著作の全體の標題として『先驅者』を選んだのは、殆んど大部分の文章が全世界を擧げての戰爭の暴風の中にあり、世界的反動の中にありながら自己の思想の自由を失はず、その國際的信仰を破棄しなかつた少數の勇敢な人々に關係して居るからである。未來はこれ等の嘲笑せられ、罵られ、嚇かされ、罪せられ、投獄せられた偉大な先驅者をば尊敬するであらう。私はベルトランド●ラッセル、イー●ジー●モーレル、マキシム●ゴルキー、ゲー●エフ●ニコライ、アウギュスト●フォーレル、アンドレア●ラッコー、アンリ●バービュス、ステファン●ツワイグ、及佛蘭西、亞米利加、瑞西の選ばれた勇者等自由の爲めに戰つた人々のことを書いた。

これ等の論文の首に、私は戰爭の初めに書いた頌詩 ARA PACIS. を添へた。それは平和と一致とに對する信仰の一齣である。この信仰の他の一齣は最後の章中に含まれておる。今は信仰—國家や暴壓的意見の暴力の面前に立つて不撓なる思想の獨立を公言する信仰の動いておる時代である。

私はこの論文集に『アグリゲンツムのエムペドークルズと憎惡の範圍』※に關する默想を加へようと思つた。がそれは少し長すぎたし、一卷の均齋を破らんことを恐れてよした。

※一九一八年巴里 La Maison Trancaite. から小冊子として發行された。

論文を一卷とするについては、嚴密に發表年月順にはしなかつた。その內容の性質に從ひ技巧上の考察から集めるのがよいように思はれたが。各文章の終に最初發表した日附を附記して置いた。そして出來る丈書きあげた日をも附記した。

尙ほ二三語說明をして讀者に私の全體の意圖を明にしたい。



『爭の上にあれ』と『先驅者』とは私の戰爭に關する論文、過去五年間に書いた論文の一部分である。そして瑞西で發表したもののみを載せてある。だから輯集は不完全である。私は書いたもの全部を集め得なかつた。尙ほ私の手にある範圍も弘く永久的價値ある最も大切な材料は此年頃、私が各國の自由精神の人々、迫害せられた人々から絕えず受取つた手紙や、秘密話や、道德上の懺悔について日々作つた記錄である。それに於ても私は同樣に出來る丈嚴肅に私自身の思想、戰爭に對する私の立場を書きつけた。複合に於ける單一、その記錄は恰も熱狂、暴力、虛僞、の不羈の力と世界中の自由な魂とが角逐して居る繪圖である。未だ餘程長い時を經なければこの記錄を公にしてよいやうにはならないだらう。この問題の書類は已に數部の寫本が出來ておるが——來らんとする時代に於て吾々の努力、吾々の苦痛、吾々の不屈の信仰の證人として役立つ丈で充分である。

一九一九年六月巴里に於て

ロマン●ローラン

# 先驅者

## 目次

献呈の辭
序
一　ARA PACIS.（平和の祭壇に……一
二　登れ、紆曲せる道を……一二
三　虐殺せられたる人々に……二四
四　死なないアンチゴーネとなれ……三九
五　動亂の巷より來る女の聲……四三
六　自　由……四八
七　自由なる露西亞—解放者……五〇

八　自由なる魂―トルストイ……五三
九　マキシム・ゴルキイへ……六一
十　マキシム・ゴルキイよりの手紙二通……六四
十一　亞米利加の操觚者達に……七二
十二　亞米利加よりの自由の聲……七八
十三　イー・チー・モーレルの爲めに……一〇〇
十四　若き瑞西……一〇三
十五　砲火の下……一三四
十六　皇帝萬歳、死に行く者共君を祝し奉る……一五一
十七　皇帝萬歳、生きんとする者共君を祝し奉る……一六一
十八　戰中の人々……一七〇
十九　Vox Clamantis……一九九



# 目次

二十　偉大なる歐羅巴人ゲー・エフ・ニコライ……二三四
二十一　アウギュスト・フォーレル讀後省察……一九五
二十二　精神的國際主義の爲めに……三一二
二十三　歐羅巴人に訴ふ……三二九
二十四　大統領ウィルソンに與ふる公開狀……三四三
二十五　勝ち誇れるビスマルキズムに對して……三四八
二十六　精神獨立の宣言……三五〇
二十の補遺……三六六

畢

内務省警保局
圖書印

# 者

ARA PACIS.

De profundis clamans 總ての憎しみの深淵より、
聖き平和よ、汝にむかひて吾、吾が歌をあぐ。

軍隊の喧聲もこれを消しはせじ。
泰然として紅に染める潮のあげ來るを、吾見る、
不具となれる歐羅巴の美しき軀を運びて、

ロマン・ローラン著

尙ほ我は聞けり、人々の魂をゆり動かす風の吹きたけるを。

吾は一人にて立てど、汝に忠信なるべし。
吾は神を濟す血の聖餐には陪せじ。
吾は人の子の肉を食はじ。

吾はあらゆる者の同胞なり、吾皆を愛す、
短き一日の命を自ら奪ひ去るはかなき蜉蝣の人々よ。

榮の桂よりも高く、槲よりも高く、
聖き山の上、我心より橄欖生へん、
その枝は日に照り　蟬そこに歌はん。



***

崇高き平和、
その主權の下に、
世界の動亂を抱き、
波浪の騷音を轉じて
海のリズムとなす。

大伽藍は建てられたり
相反する力の完き權衡の上に。
光まばゆき薔薇形の窓、
太陽の血潮
菱形の焰の束となりて溢れ入る

これぞ美術家の調和的眼が綴り合せたり。

翼もて大地を蔽ひ
天頂に翔る
鵬の如く、
汝一度飛べば、
今あるものを超へて嘗てありし又後あらんものを包む。

汝は喜悅の妹又愛の妹、
姉妹の中いと若くいと智く、
彼等を兩手に携ふ。
汝は二つの川を結ぶ澄める溝の如、



二列の白楊の間に天空を映せる溝。

汝は神の使、
燕の如彼方此方
岸より岸に渡り、
兩岸を繫ぐ。
或者には
「泣くな、喜悅再び來らん」と云ひ、
他の者には
「心をごるな、幸は去らんとす」と。

汝の形よき腕はやさしくも抱く

汝の剛情なる子供等を、
而して汝は彼等を見守りつゝ微笑む
彼等が汝の膨るゝ乳を銜む時。

汝は手と心とを結ぶ
互に相求めつゝも互に相遁ぐる者等の。
而して汝は馭し難き牡牛に軛をかく、
かくてその横腹を煙となす情熱を、
戰の爲めに浪費することなく、
この情熱を轉じて土地の子宮を耕さしむ
溝深く長く。こゝに種子は萠芽す。



汝は忠實なる幇助者
疲れたる力士の歸るを歡び迎ふ。
勝利者も敗北者も共に汝の愛をうく。
そは戰爭の獲物は
土地の小片に非ず
其をば他日勝利者の脂肉が
敵のそれと打ち交りて養ふべし。
獲物は運命の道具なりしことなり
その手中に屈したりしことに非ず。

オ、微笑める吾平和よ、汝の温き眼涙にぞ充てる
夏の虹、晴れたる日の夕

黄金の指もて
撒き散らされたる畑を愛撫し
落ちたる果實に氣をくばり
風や霰に潰かれたる木々の
傷を癒す。

汝の癒しの香を吾等に注ぎ、吾等の悲を鎮めて寢つかしめよ！
彼等は過ぎ去る。吾等も亦。
汝のみ唯一人永遠にぞ存る。

兄弟よ！　結合せん。而して汝も亦、吾が中の多くの力よ
吾が割かれたる心の中に爭へる！



手を聯ねて共に躍れ！

吾等は靜かに　急がず進む
そは時は吾等の獲物に非ればなり。
時は吾等の味方なり。
時代と呼ぶ楊條もて吾が平和はその巣を編む

＊＊＊

吾は野に啼く蟋蟀の如し。
暴風起り　雨瀧つ瀨と降り
溝を沒し鳴聲を打ち消すとも。
騷ぎ過去れば直ちに
小音樂家は臆せず又歌を初む。

之に同じく、煙れる東の方、荒廢せる地球の上
四人の騎士の轟く突擊、
尙ほ遠くの方にその疾驅するを聞きて
吾は吾が頭を擡げ己が歌を刊む
いと弱けれど　執拗に。

一九一四年八月十五日—廿五日。最後の二節は同じ年の秋。作
一九一五年十二月廿四日及廿五日 "Journal de Geneve" "Neue Zürcher Zeitung."
一九一七年七月ゼネヴァ "Les Tablettes"



## 二　登れ！　紆曲せる道を

私は一箇年間沈默を守つて居たけれど、それは私が『爭の上にあれ』の中で述べた信仰が搖いだが故ではない（その信仰は前にも增して固い）。私は聽かうとしない人々に話しかけるのは無益だといふことを確めたからである。事實のみが痛ましくも言ひ張る。事實のみが、光を見ることを欲せずして心の周圍を頑冥と矯慢と虛僞との厚い壁で圍繞して居る人々の心に徹することができる。

然し吾々は各國民同胞間に於ても、又自己の道德上の自由と理性と人類共存の信仰とを保護する術を知つておる人々の間に於ても、沈默と壓迫と哀愁の中にあつて望を持ち續けた心と心との間に於ても、同樣に——吾々は愛と慰めの言葉を交換することができる。吾々は互に血の雨に濡れた夜も尙ほ光が燈つておつて、その光が過去にも未來にも絕えて消ゆることのないことを信ぜねばならぬ。

歐羅巴が飛び込んだこの苦惱の深淵の中にあつて、ペンを揮ふ人々は、既に受けて來た劇痛に更に劇痛を加へることの決してないやう、そして燃え立つ憎惡の流れに新しい憎惡の理由を注ぎ込まないやう、注意せねばならぬ。罪と愚蒙の山を横つて他人の爲めに道を開き又自分の出口を見出さんと努めて居る少數の自由な魂には二つの道が開けてゐる。或者は勇ましく自分の敬愛する國土の中にあつて同國人にその誤謬を覺らしめんと企てゝゐる。これは雄々しい英國の獨立勞働黨の人々や民主的統制同盟の人々や又束縛されない心を有する美しい人々バートランド・ラッセル、イー・デー・モーレル、ノルマン・エンゼル、バーナード・ショウ等のとつた道である。これは又或る迫害せられた獨逸人（數に於ては極めて少いけれど）のとつた道である。これは又伊太利の社會主義者や露西亞の社會主義者や、愁の人悲みの人なるゴルキイのとつた道である。これは又ある自由な佛蘭西人のとつた道である。

私自身の責務は之と異り歐羅巴の互に敵となつてゐる同胞達にその缺點でなく、



美點を思ひ出さしめ、やがて何時か人類がもつと賢く愛し合ふものとなり得ることを望むの理性を甦らしめるにある。

吾々が今見ねばならぬ事實は吾々をして人類の理性に失望せしめる。後を顧ることなき進歩を信仰して幸福に眠つて居た人々にとつては、――かゝる人々は隨分多いが――覺醒は不意であつた。斯くの如き人々は不精な過度の樂天から何時の間にか底知れぬ悲觀の失神狀態に變つた。彼等は人生をば欄干の後からばかり覗いて居た。が急に快い眩想の壁がとり除かれ、罅隙が生じ斷崖の表面に、狹い小道が九十九折して通じ、それを人が進んでゐる。絶壁は此處彼處壞れて居る。足場は潰れ易い。されど吾等は構はずに通らねばならぬ。吾等は通るだらう。吾等の父祖等は斯の如き場所を澤山通過しなければならなかつた。吾等は餘り忘れようとしすぎた。二三激動の時を除いては吾々自身の生涯の大部分に安全な時代を通つて來た。が過去に於ては動亂の時代の方が平靜な時代よりも普通であつた。預見もなければ追想

もない異常な平和な社會に居睡りして居た人々にとつては今日に起つておる事件は恐ろしく異常事であらう。吾等をして過去が知つて居る人々を想ひ出さしめよ。解放者佛陀を思へ。罪なくして苦しみ仇討せられた者の神ヂヨニソスーザグリュウスを拜むオルフォクを思へ。祖國がサイラスに荒されるのを目擊せねばならなかつたエレアのクセァノフーネスを、拷問せられたチェノー、毒殺せられたソクラテス、三十人暴君の治世の間夢みて居たプラトー、目前に迫れる國の破滅を支へたマーカスゥアウレリウスを思へ。舊世界の破滅を見守つた人々を思ひ出さしめよ。自分の町がヴアンダル人の攻擊の爲めに陷らんとして居る時死んで行つたヒッポーの僧正を思へ。歐羅巴が狼の住家の樣になつた時裝飾家となり建築家となり音樂家となつて働いた僧侶を思へ。ダンテ、コペルニカス、サボナローラを思へ。追放せられ迫害せられ火炙にせられた人々を思へ。虛弱な體をもちながら、自分の國が侵害せられ村々の燒かれるその光で不滅のエチカを書いたスピノザを思へ。守りなき城の中、



高い枕の轉寢に、田舍の敎會の塔から般々と響き來る鐘の音を聞いてか、又は夢の中に今宵殺さるゝやも知れずと自問してか目を覺した我ミカエル・ヅ・モンテーヌを思へ。人は凡そ不快な出來事の記憶を呼びさますを好まない。人は自分の平靜を亂すやうな事を思ひたくない。然し世界の歷史に於て平靜は極稀であつた。又偉大な魂の作られたのも平靜な境遇に於てではなかつた。身震ひせずに今起つておる狂亂の洪水を熟考しようではないか。歷史のリズムに調和する耳を持つておる人々にとつては善も惡もすべて皆同じ仕事を助ける。感じ易く激し易い性質の人々はこの洪水に推し流され血に染める道を進みそして一樣に友愛の理性が差し招く方に否應なしに進んで居る。若し吾々が人間の常識や善意や道德上の勇氣や親切に賴らねばならないとしたなら、未來を失望する相當の理由がある。然し進まんともしない又進むことの出來ない人々も盲目な力に推し進められ囈言を云ふ群衆も目的地に進んで行く。それは統一である。

＊＊＊

我佛蘭西の統一も各州の永年の爭鬪の結果鍛ひ作られた。或る時には一州、一村さへも一國であつた。百年も以上の間アルマニヤクとバーガンヂアン（私の祖先）とは互に頭を打ち破りつこをして居たが結局一つの血から出たものだといふことを發見した。今や佛蘭西と獨逸との血を混交して居るこの戰は、やがて佛蘭西と獨逸とが和合して英雄時代の野蠻な英雄のやうに一つの盃から飲むに到るよう導いておるのである。彼等は爭鬪し反噬して居るけれどもその掴み合ひこそやがて彼等を和合せしめる。お互に破壞せうと努めて居る軍隊は戰爭で互に顏と顏と相接しなかつた前よりはずつと精神が近しくなつて居る。彼等は互に殺し合ふ、然し今や少くとも無知が死の最低の範圍であることは知つて來た。兵士達は戰つて居ながらも互に諒解したい希望を有して居るといふことを明かに證する證據が澤山兩軍から擧らげれ



た。こちらの塹壕から敵の塹壕を狙つておる人々は互に敵ではあるが最早や見知らぬ人ではない。遠からざる日に西歐の國民の聯合は新しい祖國を作りそこ　道が開けて尙更に大なる祖國卽歐羅巴に達するであらう。既に吾々は十數國の歐羅巴が知らず知らず聯合を作り二軍に別れて戰つておるのを見ておるでないか。もう國と國との戰は州と州との戰と同じように瀆神なものとなつた。この聯合によつて今日の義務は明日は罪惡となるだらう。將來この和合の必要なことは色々の聲が確めて居るのではないか。ウキリアム二世は「歐洲聯邦」を稱へ、ハノトーは「歐洲聯合」を唱へ、悼ましい回想あるかのヘッケルとオストワルドの「諸國家聯合」を稱へたこと。各何れも疑ひもなく自分自身の聖者の爲に働いた。然しこれ等の聖者は皆一樣に同じ主に仕へたのだ。……

否、そればかりでない恰も土地未だ定形なかりし時代に起つた苦しみの中にあるかのやうに舊世界の三大陸から人間が集り來り、互に相擊つておるこのすばらしい

渾沌の有樣は、暴力により、精神的の力により、戰爭により、平和により共に地球の兩半思想の兩半球、歐と亞が將來溶合することを準備する人種的練金術である。私はユウトピアを語るものでない。この接近は數年間數多の前兆がその序曲を奏して居た。思想や藝術に於ても政治や商業の國に於ても互に相引き寄せて居た。戰爭は單に此の運動に加速度を與へたのみであつた。そして未だ戰爭の狂亂せる中にあつて人々はこれが爲めに働いて居る。二年前一交戰國に歐亞の文明を比較研究し相互に之を浸透せしむる爲めの大なる學會が設立せられた。

此等學會の一のプログラムに曰く『現代の最も特殊な現象は、早い時代からずつと澤山の異つた文明が手を採り合つた所から、世界的の文明が形成さるゝに到つたことである。過去のどの時代にも近世紀殊に現世紀に於て人類が經驗したものほど强く人類を勢附けた力を見たことはない。此の總ての力が合流した急湍は一の大合流を作つたが、これぞ實に十九世紀二十世紀の成効であつて他に較ぶるものもない。



國家に於ても科學に於ても藝術に於ても、到る處今や全人類の大個性が出來上つて來て居る。到る處世界的な人類の魂の新生命が起りつゝある。三つの精神的社會的世界、三種の人類（歐羅巴、近東印度及極東）が單一な人類を形成せんと集り初めた。六十年前まで各個人は人類の中の一部族の又人生の各個異つた大きな形の一員であつた。が今や全人類が造つておる大きな生命の流に與るやうになつた。で各個人は自分の行動をばその流の法則に從つてとらねばならず、その流れの中に自分の地位を見出さねばならぬ。此れをなすに非れば自己の最大部を失つてしまう。勿論過去の宗教や藝術や思想やの最も有意義な特徴を疑ふのではない、それ等は依然として存して居たし又將來も存するだらう。然し新しい高さに擧げられそれは新しい深さに掘られねばならぬ。人生の更に廣い範圍が吾等の周圍に開けて來た。吾等は多くの者が迷亂したことを驚き過去の偉大さが萎靡したと思ふ必要はない。靜に確かに事物を新時代に適するやうなす爲めには、舵を能力あるものに委ねねばならない。

今日以後人類に生じ得る最も完全なる幸福は、人類全體の意思疎通より及び人が幸福を得る爲めに發見した雜多な道より得られるであらう。來るべき長い時の間人が地上で經驗し得る最も高い喜悅は、歐羅巴の理想と亞細亞の理想と相補綴する所から得られるだらう。』

プログラムは更に續く、『通有性と客觀性とを特色とする此の種の研究は、國民間階級間人種間に憎惡を育成する一切の事柄、分離や無益の爭鬪を招致する一切の事柄を排除する。……かゝる研究に從事する人々は、殊に此の一事卽ち憎惡や無知や誤解と戰ふことに努めねばならぬ。……彼等の見事な又火急な責務は、各人間の個性の又各國民の中に在る美を闡明することである。彼等の仕事は各國民や各階級や各人種やの間にそれぞれある異同を調整するの科學的方法を發見すると云ふ實際問題である。科學そして科學のみが熱心な努力によつて平和を贏ち得る能力がある。』

斯の如くして各國民の戰の眞唯中に各國民間の精神的平和の基礎がすへられた、



恰も燈臺が遠く離れ〴〵に居る船に遠くの港を指し示し、やがてはそれ等の船がそこに舷舷相並んで錨を下すに到るがやうである。人類の心は新しい道に入る門に達した。門は狹い、人々は狹い門を通らうとしてお互に壓し潰して居る。それをぬけると廣い公道が遠く〳〵通じて居て、それを通つて行くと皆の者を容れるやうな室のあるのが見える。恐怖に取り圍まれて居る中に理想(ヴヲジヨン)は私を慰めて呉れる。私の心は惱む、然し私の魂は光を見て居る。

＊＊＊

勇め、兄弟達！　何はともあれ望みがある。否應なしに人はその目的地に進んで居る。目的地に背を向けておると思つて居る人々さへも。一八八七年民主主義と國際平和の理想が勝ちさうであつた時、私はルナンと話をしたが彼は次の樣な預言をした。『君は生きて居る內も一度大反動を見るだらう。その時君は我等皆が防いで居

たものが破壞せられたと思ふだらう。然し心安かれ。人類の道は山路である、山嘴の間をあちらこちらとうねくつて居る。それで吾等は時々嶺から却つて遠ざかつて居ると思ふことがある。けれど吾等は登りやめることはない。』と。

萬事は吾等の理想の爲めに働いて益をする。萬事は——最惡も最善も、すべて統一を助成する。私が最惡も最善と同一だと云つておると解する勿れ。戰こそ戰を終熄せしむるものである（かくの如き人を吾等は好戰平和論者と呼ぶ）と說く（あはれな無智な奴！）心得違ひの人々と、福音の上に立つ無制限な平和論者との間には大層な相違があつて、丁度屋根裏から街頭へ早く出たいと思つて家具や子供を窓から投げ出す狂人と、のろ〳〵階段を步み降りる人々と位違つておる。進步はしておる。然し自然は急がない。そしてその方法は無駄が多い。僅かの進步も、恐ろしく富と人命とを浪費しなければ就げられない。

歐羅巴が不精〳〵に止まつたり步いたり、やくざ馬の如くに漸〳〵と、その力を統



一しなければならぬといふ信念に到着した時には、聯合は殘念ながら、盲目と中風病との聯合であつた。遂に目的地には達するだらう。然しその時には血の氣もなく疲れ切つて居るだらう。

然し吾々は永らくの間汝の其處に來るを待つて居た。吾等、總ての時代、總ての階級、總ての人種の自由な魂達は長い前に統一を就げておる。遠い〳〵埃及や東洋の文明に屬する者達。近代のソクラテス及びルシアンとも稱すべき人々、例へばトマス・モーア、エラスムス、ボルテールなど。遠い未來に屬する人々。その未來には時が環を作つて偶然に、偉大にして單純な亞細亞の思想が又回り歸つて來るであらう。總て自由な魂、總ての同胞、吾等は唯一つの人類である、迫害の數世紀は過ぎ、廣い全世界は今心と手とを繫ぎ合せた。文明と呼ぶ粘土の塑像を抱擁して、その脆弱な骨組を粉碎しないやうに守つておるのはこの斷ち難き鎖である。

一九一六年十二月 セネヴア「Le Carmel.」

九月十三日 和

## 三　虐殺せられた人々に

過去二年と半の間に起つた恐怖は西の世界にひどい精神上の打撃を與へた。何人も白耳義、セルビア、ポーランドなど、虐殺者や侵略者に踏みにじられた東西の不幸な國を忘れることは出來ない。これ等の不正な行爲は――我等は自らそれに惱まされておるが故にこれを憤慨して居るのであるが――實は半世紀、否それ以上の間歐羅巴文明がなし又は爲すを許して居たことである。

一八九四年から九六年へかけての二十萬のアルメニア人の虐殺に關して、歐羅巴の新聞紙や外交家に沈默を守らしめる爲めに、回々教國の君主は幾何の價を支拂つたかを知つておる人があらうか？　植民事業をなす間に、奪掠せられた人々の苦を誰が言ひあらはすか？。面被の一隅をあげて、ダマラランド又はコシゴーに於けるこの苦の野を一瞥した時は、誰か身慄せずにその光景を見るに堪へるか？。獨逸の



皇帝がアッチラを示してその兵卒の模範たらしめ、所謂世界中の文明國の聯合軍が、西洋よりももつと古く且つ高尚な文明に對して相競ふて文物破壞の行爲を爲したかの滿洲の虐殺、及一九〇〇年一九〇一年の支那に於ける遠征のことを、如何なる文明人が赤面することなしに考へ得るか？。※西の世界は、東歐の迫害せられた民族に、ユダヤ人に、ポーランド人に、フィンランド人に、何の援助を與へたか？。土耳古や支那が復生せんと努力せる時何の援助を與へたか？。印度の阿片に毒せられて居た支那は六十年前この恐ろしい弊より脱せんと望んだ。が二度の戰爭とその屈辱的平和の後に、支那は英國からこの毒を受取らねばならなくなつた。そしてこれが五十年の間に東印度會社に齎した利益は四億四千萬磅に達したとのことである。支那が雄々しい努力によつて、十年を經ずしてこの慘な病氣を癒し得て居る今日に於

※Victor Berard の La revolte de L'Asia の中にある滿洲戰爭の短い記事參照。なほピエル・ロチが「天上の純潔さをもつ町」天津の破壞を記載して居る。Les derniers jours de Pekin. を參照

ても、最も高い文明を有する歐羅巴の一國をして一國民を毒することによつて得る利益を放棄せしめるには輿論の力を必要とする。これは同じ西歐の國が自國民を毒することによつてその歳入を得て居ることを見ればさほど驚くことでもない。

エム●アーノルド●ポレーは書いて居る。『ゴールド●コーストで嘗て一宣教師が私になぜ黑人が歐羅巴の白人を殺すかを話した。全能の神が尋いた「汝は汝の同胞に何をしたか」と。彼は白人を恐るるようになつた。』

歐羅巴の文明は死人假置場の惡臭を發する "Jam foetet……" 歐羅巴人は墓掘人として呼ばれた。亞細亞人は夜番をして居る。

一九一六年六月十八日東京帝國大學にて偉大な印度人ラビンドナード●タゴールは次の如く云つておる。『歐羅巴の土から生え出で今全世界を風靡して居る政治的文明は、多產な雜草のやうに排外の上に基礎を置いておる。これは常に外國人を窮地に陷れ之を剿滅せんとしておる。その傾向は肉食的食人的で、他人の資源で生活



し、その全將來を呑み盡さんとする。それは他の民族の有力となることを恐れて之を禍と呼び、自國外の偉大なるものの徵候を一切挫き、他の弱い民族をいつまでも弱らして置かんと努める。……この政治的文明は科學的であつて人間的でない。それは丁度百萬長者が魂を傾けて金を儲けるように、一つの目的の爲めに全力を集中するから有力である。それは信任を裏切り、恥づることなく僞の網目を編み、貪慾と稱する大偶像を祀り、大自慢で高い價を拂つてその禮拜式を行ひ、之を愛國と呼ぶ。がこれが永續しないことは容易に預言し得られる……。』※

※日本に於ける『國民主義』と題する講演より。後一九一七年倫敦マクミラン社から『國民主義』なる一冊として發行された。この講演は近世歴史に一轉機を劃するものである。

『これは永續しない』。歐羅巴人よ！ この聲を聞くか？ 諸君は耳を塞いでおるか？ さらば內なる聲に聞け！ 吾等は吾等自身を疑はねばならぬ。世界の一切の罪を隣人に歸し自らは罪なしとする人に似てはならぬ。吾等が今日被りながら働い

ておる呪殃については吾等各自その責任を分たねばならぬ。或者は故意に選んで、或者は弱きが爲めに罪惡を犯した、が弱き者罪少しとは云ひ難い。多數の者の無情、好意の臆病、不注意な爲政者の利己心や懷疑、新聞の無知や皮肉、暴利者の貪慾、偏見を根絶すべき使命を有する思想家が却つて之を撒布する使徒となつておるかの臆病な卑屈さ。同胞の生命より自分の考へを貴しとし、自分の正しきを證明する爲めに幾百萬人を死なしめる學者の無情な誇、羅馬的であり漁師聖ペテロを外交の渡守とならしめる教會の御都合主義の會議、魂が早からび且又のやうに鋭利でその信徒等を潔めんとして犧牲にする牧師等、無氣力な信徒の盲目的服從……吾等の內誰か責なしと云ひ得るか?。吾等の內誰れが屠られた歐羅巴の血で手を洗ふことが出來るか?。各人をして自らの罪を認め之を贖ふよう努めしめよ!——が吾等をして火急の仕事に向はしめよ。

こゝに著しい事實がある。——『歐羅巴は未だ自由でない』ことである。國民の



聲は壓止されておる。世界史中この數年は大なる奴隷制度の時代と見られるだらう。歐羅巴の半分と他の半分とが自由の名に於て戰つておる。歐羅巴の兩半はよりよきものを戰ひ得んが爲めに自由を棄てた。國民の意思に訴へることは無駄である。個々の實在として、國民は、もはや存在しない。一部の政治家、數十の新聞記者は大膽にも彼此の國民の名に於て論じておる。が彼等は論ずる權利はない。彼等は自分自身以外誰をも代表して居ない。彼等は自分自身をも代表して居ない。早くも一九〇五年にモーラ(Maurras)は、輿論を指導し國民を代表すると公言するかの飼ひ馴らされた識者を罵つて ancilla plutocratiae (金力政治の僕)といつておる……。國民!。誰が自ら國民の代表者なりと云ひ得るか?。誰が戰爭中の國民の魂を知つておるか?。誰が戰爭中の國民の魂を調べようとしたか?。それは巨萬の密集した生命、相異り相鬩ぐ生命、章魚の足のように四方八方に出ておるけれど基は一つになつておる生命から成つておる一怪物である。……それは一切の本能、一切の理性、一切

の背理のごつちやまぜである。奈落から吹いて來る風、人獸主義の沸きかへる底から出て來る盲目な狂亂せる力。破壞と自己破滅をなさんとする狂せる衝動。群衆の食慾、こじつけの宗教、魂をして永遠を慕はせるように、自分の苦、他人の苦によつて不健全な喜の鎭靜を求むるやうに神秘的に作ること、自分でもつて居なくて欲しがつて居る統一を他人に課する權利を要求する佯りの理性の專制。過去の記憶に焚き附けられた想像の浪漫的の閃き。プレーナスの vae victis（被征服者に禍あれ）事情によつては gloria victis（被征服者に譽あれ）を振りまはす官製歷史、愛國者歷史の幻燈會、……平和秩序の場合には社會が蹴飛ばしておるこれ等一切の潛伏した惡魔が情熱の波に乘つて周章狼狽して立ち上つて來る。……吾々は皆各自章魚の足に絡つておる。吾等は各自自分の中に善惡の衝動が縺れ合ひ絡み合つて交錯して居るのを發見する。もつれた袴糸、誰がそれをほぐすか？……そこから頑固な運命の感が出てくる。かゝる危機には人はそれに支配される。がこの感は主として彼等が自ら



自由になるに必要な努力――多樣で長びくけれど彼等の力のよくなし得る所である――に面して意氣沮喪することから起つて來る。もし各人がなし得る所をなすならば（それ以上は必要なし）運命は頑固でないことが明になる。外見上の宿命は世界的のあきらめから起つて來る。吾人は自らを運命に委せたのでその罪を負はねばならぬ。

が罪の分け前は一樣でない。名譽を受くべき者には名譽あれ。今日歐羅巴の政治が作つておる忌はしいシチウの中では錢が美味である。社會は鎖で繫がれその鎖を持つ手はプルタス（富の神）の手である。プルタスが國家の眞の主であり眞の支配者である。國家を詐欺の會社とし騙りの事業とするのは彼である。讀者は吾等が今受けておる禍の全責任を彼又は此の社會團體或は彼又は此の個人に負はせようと望んで居ると思つてはならない。吾等はそのやうに罪無きものではない。我々は誰をも替罪羊（古猶太に於て贖罪式日に祭司が象徴的に頭に人民の罪を負はせて後野に放ちし山羊）としたくない。そうなれば甚だ容易な

解決法である。が我等は Is fecit cui prodest と云はない。吾等は戰爭を望んだ者が今恥づることなく戰爭で儲けて居るといふことは云はない。彼等が欲したのは利益であつた。そして如何にして儲けるかは彼等には主要でない。彼等は平和にも戰爭にも、戰爭にも平和にも同樣に適應する。何れも皆彼等の粉挽場へ入つて來る穀物であるから、私は如何にこの守錢奴が錢の外一切の物に無頓着であるかを澤山の中から一例あげたい。獨逸の大資本家の一團がノルマンヂーの鑛山を買ひ佛蘭西の鑛產の五分の一を所有したのは最近のことである。一九〇八年から一九一三年まで彼等は自分の利益の爲めに佛蘭西の鐵工業を發達せしめ、現に獨逸の戰線を砲擊して居る吾國の大砲の製造を助けた。このやうな人間は昔嘶のマイダス、觸るると黃金のマイダス王である。彼等が潛かに遠慮の計を抱いておると思ふな。彼等は短慮の人である。彼等の目的は出來る丈多く出來る丈早く富を積むことである。吾等は現代の呪殃である反社會的利己主義の頂點を彼等に於て見る。彼等は單に錢の奴隷



となつておる時代の最も典型的な人物である。有識者、新聞雜誌、政治家、內閣諸公（愚にもつかぬお人形！）は自分の好む好まぬに拘らず暴利者の手中の道具であり、彼等を公衆の目より隱す衝立の役をしておる。その間に人民の愚昧、その宿命的の服從、彼等の祖先から受け繼いだ神秘主義、これ等が人民をして僞を狂暴の颶風に對して無力ならしめ相互の殺戮に追ひやる……。

各國民は常にそれ〴〵相當した政府をもつといふ意地惡い殘酷な諺がある。もしこれが眞實なら吾等は失望すべき理由がある。何處に吾等は正しき人間が握手するを潔しとするやうな政府を見出し得るか？　勞働しておる民衆が彼等を支配して居る人々を適當に統制し得ないことは明白すぎる。常に爲政者の過誤には彼等がその罪過の價を拂はねばならぬこと丈で充分である。之に加へて支配されるものに責任を負はせるのは余りひどすぎる。人民の爲めに働く人々は自分を犧牲にして理想の爲めに死ぬる。他人を犧牲に送る人は利益の爲めに生きる。かくの如くして利益が

理想より長生きすることになつて來た。戰爭が長びくと初めは非常に理想主義的であつても、長びくに從つて商賣的になつて遂にフローベールの書いたやうに『錢の爲めの戰爭』になつてしまう。――繰り返して云ふが戰爭は金の爲めに初められると申すのではない。が戰爭が始まるとすぐ錢の搾り取りが初まる。血が流れ、錢が流れる、が誰れもその流れを止めようとしない。一切の階級、一切の國民に屬する特權ある人々が數千、名門の人、成金、貴公子、鐵工場主、シンヂケート投機商人、陸海軍御用商人、無冠の王など――翼の蔭に隱れ、寄生虫群に取りまかれ之を養つて――貪慾な利得の動機の爲めに人類の善き本能も惡しき本能をも利用し得る。彼等は人間の理想により人間の誇により、怨恨により憎惡によつて儲ける。彼等は同じ仲間の人間の殘忍な考により又勇氣により、自己犧牲の精神により、自分の血を滴さしめるようなヒロイズムにより、限りなき信仰の富により、一樣に利得を收める……。



其筋の注意により抹消

# 其筋の注意により抹消

誰が今日戰爭の進行を止め得るか？　誰が野獸を再び捕へてその檻に入れ得るか？　多分最初それを放した人でも野獸使ひでも出來ない。却つて彼等は、今度は自分等が食ひ殺される番がすぐ來ることを知つておる。杯には血が一杯盛られておる、最後の一滴まで飲みほさねばならぬ。豪飲せよ、文明！　然し汝が飽食し、平和が又數千萬の死屍の上を踏んで來り、汝が一睡して暴飲の醉醒めた時は汝は又正氣に歸るだらうか？　汝は汝が被つて居た僞の皮を剝いて自分のみじめさをつくづく考へようとするか？　生きて行くことができ又生きて行かねばならぬ人々は朽ち果てた制度の執念深くまつはるのを振り切る勇氣があるか？　人々よ、結合せよ！すべての人種の人民よ、咎むべきは多であれ少であれ、すべての苦しみ、すべての血を流して、不幸にあつての同胞である、進んで宥恕と再生の同胞となれ。怨恨を忘れよ、怨恨は汝等を共斃れとならしめる。喪服を着けて結合せよ．死は人類の大家族を憂へしめる。數百萬の同胞の苦痛により死により汝等は密なる統一であるこ

とを覺らしめられた。尙ほ戰後に於てこの統一が、二三の利己的の利益を得んとする破廉恥漢が前よりも固く築かんとする國境を破壞することを見よ。

もしも汝がこの道を進むことを誤り、戰爭がその初穗として各國民間に社會的再生を齎らさないならば、思想の女王、人類の道案內は歐羅巴に別れを告げる。汝は汝の道を迷ふた。汝は墓の中で足踏みして居る。墓は汝の居るべき適當の場所である。そこに寢床を作れ。他の者をして世界を指導せしめよ！。

一九一六年精靈日（十一月二日）

一九一六年十一月及十二月　セネヴア（Demain）



## 四　死なゝいアンチゴーネとなれ

男でも女でも吾々皆に一樣に可能る範圍內で最も力ある行動は個人的行動である。人の人に對する、魂の魂に對する行動である。言葉による、模範による、全人格による行動である。歐洲の婦人達よ、あなた方は出來る丈この力を用ゆることに油斷するな。あたな方は世界を惱ます災禍を剿滅せしめんとして戰爭に對して戰をなさんとして居る。あなた方のなす所は正しい。然しあなた方の行動は遲すぎた。あなた方は此の戰爭の開始前に此に對して戰ふことが出來た、又戰ふべきであつた。男子の心の中に戰ふ可きであつた。あなた方はあなた方の力を吾等の上に實現しなかつた。母、姉妹、助手、友、戀人達は皆男の心を意の儘に形造ることが出來る。子供の魂はあなた方の手中にある。自分が尊敬し愛して居る女と關係しては男は全くの子供である。なぜあなた方は男の足跡を導かないか？　私自身の例を擧げるな

らば私は自分の性質の中で最もよきものを、あなた方の中の一人に負ふて居ると云ひ得る。この旋風の中にあつて、私が人類同胞の信仰と、愛を愛する心と憎惡を卑む心とを支持することの出來たのは二三の女のお蔭である。その中で唯二人丈を名指さう。第一に私は母に負ふ所が多い。母は眞の基督者で私の幼い頃私に永遠を憧う心を與へた。第二には偉大なる歐羅巴人マルヴィダ●フォン●マイセンブルグに負ふ所が多い。これは崇高な理想家でその落ち着いた晩年は私の青年時代の友であつた。もし一人の女が一人の男の魂を救ふことが出來るとするならば、あなた方女はなぜ全體の男の魂を救はないのですか。それは勿論あなた方の中の極少數しか自らの魂が救はれて居ないからです。初まりから始めなさい。茲に政治上の權利を獲得（その實際上の重要さは見下げる所ではないが）するよりも更に火急な問題がある。最も火急な問題はあなた方自身を獲得することである。男の影法師になることを止めよ、男の情熱や矜恃や破壞に對する衝動の影法師になることを止めよ。同情の同



胞的責任や相互扶助や全人類の社會の理想を明かに見よ。これ等こそ基督の聲が基督者に命ずる最高の律法、自由な理性が自由な魂に命ずる律法を完了するものである。然し歐羅巴に於けるあなた方の中の何と多くの人が今男の心を威壓した熱情の疾風にさらはれたではないか。あなた方の中の何と多勢の人が、男の心を開發することなく却つて世界的の狂亂に熱を加へたではないか。

先づあなた方の心の中に平和を來らせよ。先づ旨目な殺伐の精神から脱せよ。爭鬪の中に縺れ込むな。戰爭に戰を挑むとも戰を終熄せしめ得ないだらう。あなた方の第一歩はあなた方の中に在る未來をこの大洪水より救ひ出すことによつてあなた方の心を戰より救ふことにあらねばならぬ。戰士の吐く憎しみの言葉に一々親切の行爲を以て答へ、すべての犧牲者に愛を加へよ。あなたがたの居ること丈でも正路を迷ひ出た情熱を靜に拒否し得るやうにありたい。あなた方は光あり愍みある眼ざしを以て吾等にその非理を恥ぢしめるやうな觀客となれ。戰の中にあつて平和の生け

る化身となれ。憎惡を棄てそして苦しみ戰へる同胞達の間に何の差別をも設けない死せざるアンチ・ゴーネとなれ。

一九一五年 倫敦「Jus suffragii.」
一九一六年一月ゼネヴァ「demain.」



## 五　動亂の巷より來る女の聲

愍れみあり之を外に表白し得る女　戰爭を嫌厭することを公言し犧牲者、すべての犧牲者に對する憐愍の情を發表し得る女。虐殺を好む激情の合唱に聲を合せることを拒む女。コルネーイユの女傑を眞似んとしない純粹の佛蘭西の女。何たる慰めぞ！

私は傷いた魂を害ふような何事も云ふことを避けたい。私はどんなに多くの哀愁どんなに多くの漏らされない愛が頑い熱心の甲の下に、幾千の女の心中に秘められて居るかを知つておる。彼等は落ちんことを恐れてしがみつき筋肉が强直して居る。彼等は歩き話し笑ふ。が大きい傷口が横腹に開いてそこから心臟の血が進り出て居る　彼等がこの人間的でない强制をふり棄てる時、世界が血腥いヒロイズムに飽食して嫌厭を公言するに躊躇しないやうな時が目捷の間に迫つておることを預見するに

は決して預言者の能力を必要としない。

幼年の時から我々の心は國家の教育によつて歪められ、コルネーイユの天才や革命時代の偉人が甦らしめた古典的な思想の曠野から、切れ〳〵の碎片を寄せ集めて作つた技功的な理想を吹き込まれた。この理想は喜んで個性を國家に犧牲とするものであり、氣の狂つた理想に常識を犧牲とするものである。かくの如き教育を受けた人々の心には人生は見掛倒しで且殘虐な三段論法になる。その前提は曖昧であるが結論は殘忍である。吾々は皆その手にかゝつて來た。人間の本性を殺してしまう此の第二の天性より魂を救ひ出すには、どんなに恐ろしい爭鬪をしなければならないかを私自身よりよりよく知るものはない。此等の爭鬪の歴史は吾々の矛盾の歴史である。神は感謝すべき哉、この戰爭否戰爭以上のこの人類の激亂は吾々の疑惑を一掃し躊躇に止めを刺し吾等をして無理やりにも選ばしめるだらう。

マーセル・カピーが選ばれた。「動亂の巷より來たる女の聲」を通じて、空想論や



美辭法の詭辯が振りすてた佛蘭西人民の常識が息づいておる。こゝに彼女の書物の力がある。此の生々した、心魂に徹するやうなあざむかれざる自由な理想(ヴィジョン)は苦惱と嘲笑の暗示に敏感である。何となれば歐洲諸國民を苦しめて居る目に見えざる史詩の中に經歴の各典型が充滿して居る。——大勳功と大罪惡、崇高な敬虔の行と貪慾な利己心、英雄と怪物、若し笑ふことが許されるならば、若し最も苦しい試練の中にあつて笑ふことが佛蘭西人らしき事であるならば、笑は僞善を防ぐ武具、殺されて居る常識を辯護する爲めに用ゐられた武具となるのでどんなに正しいことであるだらう！　今日ほど僞善が蔓延しその災厄の甚だしいことは嘗てない。僞善は惡德が美德に拂ふ敬意であると云はれて居る。その通りだ、然し敬意が過ぎておる。本能や利己心や私怨が愛國といふ神聖な御袖にかくれて居ることを示す面白い喜劇である。これ等ヒロイズムのターチュフは立派な全燔祭——他人の——を捧げんとしておる。此等哀れな瞞され犧牲にさゝげられたオルゴン共は、自分達を守つて呉

れ自分達を啓發して呉れる人々を殺さうと熱心する。モリエールやベン・ジョンソン向きの何とよい見せ物だ。マーセル・カピーの書物は腐つた木に生へる名も知られない毒筍のやうに現代に生へ出て來たこれ等多年生の典型を澤山集めて吾等に示して呉れる。然し彼等が養分をとつて居た古株が青い芽を吹き出した。吾等は佛蘭西の森の心はまだ健全だと認める。毒はまだ吾々の生命の中までは食ひ込んでは居ない。

勇め友よ、佛蘭西を愛する皆の人よ。佛蘭西を崇ぶ最善の道は佛蘭西は常識ありカピーの書物のやさしき勇ましき聲を模範とし先導とせよ。兩眼を用ゐよ。心に言はしめよ。大きな聲に瞞まさるゝな。歐羅巴の人々よ。此の群衆の心裡狀態、草食ふ場所を羊飼ひや番犬に教へて貰うことを好む羊群の心裡狀態を振りすてよ。勇めよ。全世界を擧げて狂暴するともたつた一人の自由な魂の發する信仰と希望の叫聲



を聞こえないやうにすることも、又佛蘭西告天子が天に向けて飛翔する歌を聞こえないやうにすることも出來ない。

一九一六年三月廿一日

※1 マーセル・カピーの Une voix de femme dans la melee. の序文、
※2 モリエールの有名喜劇
※3 ターチューフの中に出て來る輕信者

# 六　自　由

戰爭は吾等に文明の寶物の如何に脆いかを示した。吾等の所有物の中で吾等が最も誇つて居た自由が最も脆いことが解つた。自由は數世紀の間犧牲を拂ひ、氣長い努力をなし、苦をうけ、勇士の行や、強い信仰によつて漸々に獲得したものである。吾等はその黄金の雰圍氣を吸ひ込んだ。吾等が自由を吸ふことは恰も吾等が地球の表面に漲り、吾等の肺臓に溢れ込む空氣を吸ふと同じように自然なことのやうに思はれた。が吾等からこの生の寶物を掠め去るのには僅かに數日で充分であつた。數時間の内に世界を擧げて、自由の震へる翼は網にかゝつたように捕へられた。人々は自由を引き渡してしまつた。否それば かりでなく人々は自ら奴隷となることを歡呼を以て祝福した。吾等は又古くからの眞理を學んだ『一度丈ですつかり成功した勝利はない。勝利とは失敗すればすぐ沒收されることを條件として毎日維持して行



かねばならぬ連續した行爲である』と。

賣られた自由！　信仰厚き者の心の中に避難し汝の傷いた羽を摺めよ！　又來ん日に汝の雄飛をなすであらう。その時は汝は再び民衆の偶像となるであらう。今汝を壓迫する人々が其の時は汝を讃美して歌ふだらう。然し私の目には汝が今貧弱になり、强奪せられ、打ちのめされて居るこの試錬の時に於てほど美しく見えたことは一度もない。汝は汝を愛するものに與ふべき何物をも殘して居ない。——危險と大膽な眼の微笑の外は。それにも拘らず全世界の富もこの賜には比ぶべくもない。輿論の從僕、成効の崇拜者はその賜の爲めに吾等と競ふことは決してしないだらう。然！吾等は汝に忠實であらふ。賤しめられ棄てられたる基督よ。吾等は汝が墓の中から再び甦ることを知つておるから。

一九一六年五月一日　ミラン　"Avanci"

## 七　自由なる露西亞——解放者

今汝の大革命を成就した露西亞の兄弟達よ。吾等は啻に汝を祝するのみならず、汝に感謝する。汝が自由を贏ち得たことによつて汝は自身の爲めのならず、同じく吾等の爲めにも、又舊き西歐羅巴の同胞の爲めにも働いたのである。

人類の進歩は俗世界の進歩であつた。すぐ息が切れ、再三再四疲れ、進歩は遲くなり、障害につき當つて止まり、惰けた騾馬のやうに路傍に倒れた。立ち上つて發足し一段一段と進んで行くには新しく精力を覺醒し、勇ましい革命的爆發がなければならぬ。かくて意思を鼓舞し、筋力を緊張し、障害物を粉碎することが出來る。一七八九年の吾々佛蘭西の革命はかくの如き英雄的精力の爆發であつた。そして轍の中にはまり込んで居た人類を引き出して新しき出發をなさしめた。然しやつとのことで車を動かし初めるとすぐ人間は又泥濘にくつつかうとした。佛蘭西革命が歐



羅巴の爲めに出來る丈のことをしたのは昔の事となつた。啻ては人を肥やした理想、啻ては新生命の力であつた理想は最早や過去の偶像に過ぎず、吾等を後方に引き廻し障害を加へる力となつてしまつた。これが大戰爭の齎した教訓である。西歐のジャコビン黨は自由の最强敵であることを示して呉れた。

新時代にとつての新しい道と新しい抱負！　露西亞の兄弟達よ、汝の革命は吾々以前の革命の、横柄な思出に居睡して居る歐羅巴人を醒して呉れた。進め！　吾等は汝の足跡を追はう。各國民は順番に人類を導く。汝の生氣は數世紀間の强ひられた無氣力の中にあつて養はれてゐる。吾等の捨てた斧を取り上げるのは汝である。社會的不正社會的虚僞なる未墾森林の中に人類はさ迷つておるのであるが、この森の中に地を拓き日の照る道を通じて呉れ。

吾々の革命は偉大なブルジョアの仕事、その種族は今消えてない人々の仕事であつた。彼等はその粗野な美德と共に粗野な惡德を有した。現在の文明はそれ等の惡

德のみ卽彼等の熱狂彼等の貪慾を遺けておる。私は汝の革命が吾々の今陷つておる狂亂を避けて偉大な健在な友愛深き人類的な國民の出現とならんことを望む。

特に、結合せよ。吾等の例を學べ。佛蘭西の國民公會がサツルヌスのやうに多くの子供を滅ぼしたことを記憶せよ。吾々があつたよりも寛大なれ。汝の全力を揚げるならば汝が代表せる神聖なる事件を防禦することは出來るだらう。此の偶然な機會に、脊を曲げ猫のやうに喉をゴロ〳〵ならし、汝が單獨になり躓く時を待ちながら叢の中に隱れて居る狂暴な狡猾な敵に對して防禦することが出來るだらう。

最後に、ロシアの兄弟等よ！　汝は吾々の爲めのみならず汝自身の爲めに戰つて居ることを記憶せよ。一七九二年の吾が父祖は全世界に自由を齎らし來らんとしたが失敗した。それは彼等が最善の道を選ばなかつたからである。然し彼等は高い理想を有して居た。これ等の理想をして亦汝等のものたらしめよ。歐羅巴に平和と自由の賜物を齎らせよ。

一九一七年五月一日　ヒネヴァ（Demain.）



## 八　自由なる魂――トルストイ

トルストイはその日記※1――今漸くポール・ビリコフによつてその佛譯が出たばかりであるが――に於て、自分の人格は早い頃に自分が愛した人々の結合したものであるとの考へを述べておる。彼は云ふ、各の連續した存在が友の範圍及魂の範圍と力を擴大する※2と。

※1 日本に於いはトルストイ全集第十三卷中に納められておる。

※2 一八九五年十二月七日、トルストイ全集一〇頁。

一般に云ふと大人格者はその中に一つ以上の魂を含んで居ると云ひ得る。これ等の魂はそれ等の中の一の周圍に集る。丁度多くの友達の集りで一番強い人格を有する者が一つの主權を打ち建てるように。

トルストイの中には一人以上の人が居る。大藝術家も居る。偉大なる基督者も居

る。制御すべからざる本能と情熱とを有する人も居る。然しトルストイの中には一人の統率者が居ることは、彼の日が長くせられ、彼の王國が擴張せられた時に、明になり、今までよりも一層明になつた。この統率者は束縛せられざる理性である。私がこゝで尊敬を拂はんとするのは此の自由なる理性である。今日萬人が要求して居るのは萬事はさし措いてこれである。

吾等の時代は他の精力、トルストイが多量に有して居た他の精力はさほど貧弱でない。吾等の時代は情熱やヒロイズムは食ひ飽きた。技巧の能力も缺けては居ない。宗教の火も拒まれては居ない。神――ありとある神々も――諸國民の間にたけり狂ふて居る大洪水に燃え立つ炎を投じた。基督もとり除けてはない。福音書の中に呪咀と殺戮とを正當なる理由ありとなす主張を見出し得なかつた國は多くの國中、――交戰國と中立國とに拘らず、獨逸系ローマ系兩瑞西國をも含んで、――一國もなかつた。



今日ヒロイズムよりも稀な、美よりも稀な、神聖よりも稀なものは自由な魂である。束縛を脱し、偏見を脱し、偶像なき、階級、國民の獨斷より脱し、凡ての宗教より脱せる。自分の眼で見、自分の心で愛し、自分の理性で判斷するだけの勇氣と眞正直とを有せる魂、影法師でなくて一個の人。

極端にまで、トルストイはかくの如き例を示して居る。彼は自由であつた。じつとして眸を凝らして常に彼は事件を見守り、瞬きもせず眞正面に人を見て居た。彼の自由なる判斷は彼の愛情によつても亂されなかつた。彼が最も尊重した人基督に對しても彼が不羈であつた事が一番よくこれを示して居る。この偉大なる基督者は基督に從ふことによつてなる基督者ではなかつた。彼はその生涯の大部分を捧げて福音書を研究し解釋し流布したけれど彼は『福音書はかく云ふが故に彼の事又は此の事は眞理だ』とは決して云はなかつた。トルストイの考は『福音書は斯く〳〵しかゞ〳〵と云ふが故に眞理だ』であつた。眞理を批判するのは汝自身であらねばなら

ぬ、汝の自由なる理性であらねばならぬ。

多くの人に知られて居ない文章がある、多分未だ公刊せられて居ないと信ずる。それは『彼とヤスヤナ・ポリヤナで過した一九一〇年十月二十一日の夜についての百姓ミハイル・ノヴィコフの話』である。時はトルストイがその家を逃げた一週間前である。吾々はトルストイが澤山の百姓達とどんなことを話したかを讀む。此等の中に二人の村の青年があつて、それはその時軍務に召集されて居たので議論の題目は自然軍務のことであつた。社會民主黨に屬する一青年は國王や祭壇にでなく國家と國民に仕へる爲めに軍務に服するのだと云つた。(吾々はトルストイが「社會主義愛國者」と知己になる前に、「節を變ずる術」に關する長談議を聞かない前に死ななかつたのは彼の幸運だと思ふ)二三の他の百姓は之に反對した。トルストイは何が國の境であるかと聞き返し、自分にとつては全世界が祖國だと公言した。も一人の兵士は聖書の中から殺さんとするものを防ぐ章句を引照した。トルストイは引



照はどんな場合でも適當なのを發見することが出來ることを知つて居たので之を信じなかつた。彼は次のやうに云つた。

『我々はモーゼやキリストが自分自身や隣人に惡をなす勿れと命じたが故に、正にその理由で、惡をなさないのではない。惡をなさないのは吾等の義務である。自身にも隣人にも惡をなすのは人間の本性に反するが故である。私は獸類のことを云つて居るのではない。汝等自身の中に神を見出せ。然らば神は汝曹に何が善であり何が惡であり何が可能であり何が不可能であるかを知るを得しむるだらう。けれど吾々が外部の權力、――或る人にはモーゼやキリストであれ、又他の人にはモハメットであれ、又他の人には社會主義者マルクスであれ――によつて導かれて居る間は吾々は相互に敵たるを免れないであらう。』

私はこの力ある言葉を弘く知らしめたい。私が再三繰り返し公言した如く、世界が惱まされて居る最大惡は惡人の力でなくて善の力の薄弱である。此の薄弱は大部

分意思の墮性に原因し獨立の判斷を恐れること道德上の臆病に原因して居る。自分の鎖を自ら斷ち切つた最も大膽なる人もすぐ新しい絆をとらんとして居る。一つの社會的迷信を脱するや否や、又直に念入りに新しい迷信の車に乘る用意をして居るのを見る。自分自身で考へるよりは人に導いて貰うことは容易である。この辭退が抑も罪惡の核心である。吾々が何をすれば善いか又は善くないかの決定を他人に、最も善き人に、最も信ずるに足る人に、最も愛する人に委ねることをしないようにするのが吾々各人の責任である。吾々自ら解決を求めねばならぬ、必要ならば一生かゝつても倦まず撓まず求めねばならぬ。吾々自身で得た半分の眞理は他人に學び、鸚鵡のやうに機械的に記憶して學んだ全眞理よりも遙かに價値がある。吾々が目を閉ぢて、服從的に、屈從的に、奴隷のやうに受け取つた眞理は、その樣な眞理は虛僞と同樣である。

**直立せよ！　目を開いて身の周邊を見よ！　恐るゝな！　自分自身の努力で得た**



眞理は僅少でも、最も安全な汝の光である。汝の最も缺くべからざる必要なものは廣く知識を獲得することでない。缺くべからざるは汝の得る知識は多少に拘らず、汝自身の血で養はれた汝自身のものたれ、汝自身の束縛せられざる努力の結果であれ、魂の自由こそ最高の寶である。

世々を通じて自由なる人は數に於て僅少であつた。俗衆心理が常に擴がりつゝあるのでその數はだん〳〵少くなる樣に思はれる。構はぬ！　衆團の情熱の緩慢な痲醉にかゝるこれ等多くの群衆の爲めに、吾々は自由の火焰を燃やさねばならぬ。吾等をして到る處に眞理を求めしめよ！　吾々をして何處でも見出した處でその花を摘み果實を採らしめよ！　種子を見出さばそれを天津風に吹き散らさしめよ！　どんな所から飛んで來ても、どんな所に吹いて行かれても、發芽することが可能るだらう。此の弘い世界にはよき土壤を與へる魂のない所はない。然しこれ等の魂は自由でなくてはならない。吾々は吾等の欽慕する人の爲めに奴隷にされないやうに學

ばならぬ。吾々がトルストイの如き人々に拂ふ最善の尊敬はトルストイのやうに自由であることである。

一九一七年五月一日 ゼネヴア（Les Tablettes.）



## 九　マキシム・ゴルキイ

一九一七年一月ゼネヴアに於てエー・ヴイー・ルナカルスキー氏がマキシム・ゴルキイの生涯と著作物に就いて講演した。左記ゴルキーへ與へたものはその講演の前に讀まれた。

凡十五年前巴里のソルボンヌ街のとある小さい二階下の工場でジャルル・ペギイと私その他二三の人々がいつも集つて居た。我々が丁度『Cahiers de la Quinzaine』を創刊した時だつた。吾々の編輯局の家具は見すぼらしいものだつた。が薩張りとして清潔だつた。壁は書物で埋つた。裝飾とては只一枚の寫眞があるばかり。それはトルストイとゴルキイがヤスヤナ・ポリヤナの公園で並んで立つておるのだつた。ペギイはどうしてそれを得たか私は知らなかつたが、彼は澤山の復製を作つて吾々は皆机の上にこの遙かに相距つておる二人の友の繪を持つた。この人々の目の下で私はジャン・クリストフの一部分を書いた。

二人の中の一人の老功な使徒は歐羅巴の大變災――それの來ることは彼の預言した所であり、又その場合に於てこそ彼の聲が最も必要である――の前の晩に死んでしまつた。も一人マキシム●ゴルキイはその持場に立つておる。そしてその自由な精神に充された言葉はトルストイの沈默に代つて吾等を慰めて呉れる。

ゴルキーは失神的な事件に縺れ込まれる人ではなかつた。數千の記者や藝術家や思想家が數日の間に社會の木鐸であり、保護者である役目を投げすて、狂氣した俗衆に從ひ、尙これ等俗衆を大聲をあげて一層惑亂せしめ深淵の中へ驅り込んだ悲慘な光景の中にあつて、マキシム●ゴルキイは理性と人類に對する愛とを搖がせなかつた人々の一人である。彼は窘めらるゝ者の爲め、猿轡を筱められ奴隷とせられた民衆の爲めに大膽に辯じた。長い間不幸な者卑賤な者犧牲者追放者と生活を共にして來た大藝術家は自分の時々の友を拒まなかつた。有名になつて來てからは彼等に背を向けて、その藝術の力ある光を不幸や社會的不正がひそんでおる暗い場所に投げ



こんだ。彼の寛い魂は苦を知つて居た。彼は他人の苦に目を閉ぢなかつた。

Haud ignaua mai. misclris aucgurrere disco……

終に此の試練の日に於て（この試練は吾々が自分自身を店卸しして、心と思想との眞の價値を計量することを敎へて呉れたから吾々は感謝する）精神の自由が到る處に於て壓迫されて居る此の時、吾々は大聲に叫んでマキシム●ゴルキイに尊敬を拂ねばならぬ。戰線を横り塹壕越しに、吾々は吾等の手を彼にさし延べる。今日以後吾々は諸國民の間にたけつておる憎惡の面前で、新歐羅巴の聯合を確かめねばならぬ。諸政府の「神聖同盟」の戰に對して、吾々は世界の自由な魂の同胞の交を釣合はしめる。

一九一七年一月卅日

一九一七年六月　ゼネヴア（"Demain"）

# 十　マキシム・ゴルキイよりの手紙二通

一九一六年十二月末日ペトログラードに於て。

親愛なる貴き友ロマン・ローラン君。

貴方に是非子供向きのベードーベン傳を書いて貰いたい。私は同時にエッチ・ジー・ウエルス氏に手紙を書いておる。そして同氏にはアヂソンの傳を書くように願つておる。フリヂョヲ・ナンセン氏はクリストファー・コロンブスの傳を物し、私自身はガリバルヂー傳を書き、ヘブライ詩人ビアリクはモーゼの傳を書くだらう。現代の主なる操觚者の援助によつて私は人類の指導者達の傳記を書いて、子供向きの書物を幾部か作りたいと望んでおる。全篇私の編輯の下に發行したい……。

御承知の通り現代に於て、若い人々ほど我々の注意すべきものはない。我々大人は最早一生涯の終りに近づいて吾等の子供等に傳ふべき何物もなく、みじめな生涯



を遺産とするにすぎない。この馬鹿らしい大戰爭こそ吾等の道德上の貧弱さと文明の萎微とを顯著に證明して居る。で吾等は子供等に、人類は今吾等がある如く弱くも惡しくもなかつたことを思はしめねばならぬ。總ての國民の中には偉大なる人物、美しい魂が曾てあり、今も尙ほあることを思はしめねばならぬ。今や奴隷と殘忍との盛なる時吾等何事を措いてもこの事を爲さねばならぬ……親愛なるロマン・ローラン君、是非ともベトーベンの傳記を物して貰ひたい。あなたの外に適當な人はないと信ずる！。

私はあなたが戰時中公にされた文章を再讀三讀した。そしてそれ等があなたに對する深い尊敬と愛とを起させたことを此の場合申し上げたい。あなたは確かに此の戰爭の狂愚によつて精神を冒されなかつた稀な人々の中の一人である。あなたが常に人道の最善の原則を養つて來られたことを知るのは愉快である。親愛なる友よ！。遙かなる地より君の手を握ることを許して下さい。

マキシム●ゴルキイ。

＊＊＊

一月の末ロマン●ローランは返事を書いて若い人々の爲めにベトーベンの傳を書けとの提議を承諾し且つその長さと取扱方を示され人ことをゴルキイに求めた、その書物は雜話にするか或は單に事實を叙述するかと。ローランはこの傳記叢書にソクラテス、アシシのフランシス、亞細亞の代表的人物を加へんことを提議した。

あなたは私に友として一の注意をなすことを許して呉れるか。私はあなたの手紙の中に擧げられた或る人々について幾分不安を感じる。その子供の心に及ぼす影響について不安を感じる。あなたはモーゼの樣な恐ろしい例を子供達の前に置かんと申される。あなたの目的は明かに子供にすべての光の源なる道義の力の重要さを印象せしめんとするにあるが、この光を過去に向けるか將來に向けるかは、どうで好いも事ではない。今日道義の力は缺けては居ない。澤山ある。けれども廢れた理想、窘



迫し殺戮する理想の爲めに仕へている。私は過去の偉人は人生の行爲の模範としては幾分緣遠いことを承認している。私は大概彼等に失望して居る、審美的根據からは彼等を歎稱する。が彼等が屢々なした狹量と狂熱とに耐へることができない。彼等が拜んだ多くの神々は今日は危險な偶像になつた。私は思ふに、人類は此等昔の理想を超越するに非れば、來るべき時代にもつと廣い水平線を見せなければ、その高い使命を實現するを得ないだらう。要するに私は過去を愛し歎美する。然し私は未來が過去を超越することを望む、それは可能であり又そうあらねばならぬ……

＊＊＊

マキシム●ゴルキイは次の通り答へた。

ペテログラード

一九一七年三月十八日—二十一日。

愛するロマン●ローラン君急ぎ返事を書く。ベトーベンに關する書物は十三才から十八才位の若い人の爲めに書いて貰ひたい。天才の生涯、その心の發達、重なる出來事、困難に打ち勝つたことや成功を收めたことなどは寫實的な面白いことだらう。知れる丈多くベトーベンの幼年時代のことを含ませたい。吾々は若い人々に人生に對する愛と人生に對する信任とを吹き込みたい。青年にはヒロイズムを敎へたい。人は自分が世界の創造主であり主人であることを知らねばならぬ。その一切の不幸に對する責任は彼の負ふべきものであること、人生に於ける凡て善きことは皆彼の請求する權利あることを知らねばならぬ。吾々は人々が個人主義と國民主義との鎖を斷ち切るのを援けねばならぬ。世界聯合の爲めにプロパガンダすることは絶對に必要である。

私はあなたがソクラテスの傳記を書きたいとの考へを聞いて喜ぶ。そしてあなたに書いて貰ひたい。私はあなたが古典生活を背景としアゼンスの生活を背景として



ソクラテスを描くだらうと思ふ。

最も徹底しておるのはモーゼ傳を問題としてのあなたの觀察である。私は宗敎的狂熱が人生に及ぼす混亂的影響に關してはあなたと同意見である。然し私はモーゼを單に社會改良家として選んだのである。これが彼の傳記の題目となるだらう。私はジャンヌ●ダークのことを思つた。然し私はこの題目を取扱ふことは筆者をして『人民の神秘的魂』に就いて又それと同じ樣な私の了解し能はざることに就いて語るの誤に陷らしめる虞がある。これは殊にロシア人には有害である。

アシシのフランシスの傳記は又之と異つておる。もしこの傳記の筆者がアシシのフランシスと東方の聖人、ロシアの聖徒との大いなる差異を示すことをねらつたならば優秀な非常に有益なものとなるだらう。東方は悲觀的である受働的である。ロシアの聖徒は人生を愛しない。彼等は人生を否認し人生を呪詛する。フランシスは宗敎の食道樂である。彼は異敎徒である。彼は神を自分自身の創作として自分自身

の魂の果實として愛する。彼は人生に對する愛を以て滿されて居た。彼は神に對する屈從的恐れをもつて居ない。ロシア人は如何に生きるべきかを知らない人間である。が如何に死すべきかを知つておる。私はロシアは支那よりももつと東洋的でないかしらと思ふ。吾々は神秘主義には有り餘るほど富んで居る。吾々が主として人々に吹き込まねばならぬものは活動を愛する心である。吾々は彼等の中に知識に對し人間に對し人生に對する尊敬の心を覺醒しなければならぬ。

私は心からあなたの信實をこめた手紙に感謝する。何處か大變遠くの方に自分と同じ苦しみを苦しむ人、同じものを愛する人が居るのを知ることは大なる慰めである。これを今日の如き暴力と狂暴の日に於て知ることはよろしい。最も暖かき挨拶をします。

マキシム●ゴルキー

追伸。この手紙はロシアの近頃の出來事の爲めに延引した。喜ばうロマン●ローランよ。心から喜ばう、ロシアは最早歐羅巴の保守の源泉ではない。今後ロシア人民は自由と緣を結んだ。そしてこの結婚から人類の榮光の爲めに多くの偉大なる人が生れるだらう。

一九一七年七月ゼネヴァ (Demain.)

# 十一　亞米利加の操觚者達に

## 一九一六年十月紐育 The Seuen Arts への手紙

私は一雜誌が創刊せられ、それによつて亞米利加魂がその個性を充分に自覺するに到らんとしつゝあることを知り喜んでおる。私は亞米利加の優れた運命を信ずるのであるが目下の出來事はその運命の實現を非常に必要として居る。舊世界では文明は亡びた。亞米利加は明滅しつゝある焰をかき立てねばならぬ。

諸君は吾々歐洲に在るものに勝つた大有利な點を有しておる。諸君は傳統を有しない。思想や感情の重荷を仕負つて居ない。長年の愚蒙に累はされない。知識、藝術、政治の範圍に於て先入主を有しない。すべてこれ等舊世界を打ち滅した樣なものを一切有しない。今の歐羅巴はその未來をば再三甦つて來る爭鬪と野心と怨嗟とに犧牲として捧げて居る。これ等の惱みを脱せんと努力すれば却つて捕網に新しい網



目を附け加へそれによつて殘忍な運命に捕へられるのみである。我等の運命はユーメニデスの中のアトライデスが、殘忍な呪文を破つて吳れる力ある神の言葉を空しく待つておるのに似ておる。藝術に於いて、若し吾等の作者がその形式の完全と思想の透徹を、この古典的傳統に負ふておるとすれば、この得點は偉大なる犧牲を拂つて得たものである。吾等藝術家の中でも世界の多樣な生活に目覺めておるものは極めて僅少である。彼等の心は箱庭の中に籠つておる。彼等は箱庭を出で、川に溢るゝ水が滔々と流れて全世界に注出でる廣大な場所については殆ど何等の興味をも示さない。

諸君は心の技巧的構成によつて梗塞せられることのない國に生れた。この事實によつて利を得よ、自由なれ、外國の例に奴隷となる勿れ。汝の模範は汝自身の中にある。汝自身を知ることより始めよ。

これが最初の義務である。相集つて汝の國を作つておる各々異つた個性を汝自身

藝術に表現することを恐れてはならぬ。自由に正直に完全に表現せよ。創始性を出さんと努むることなく。然し前の人々が如何な表現を好んだかに頓着することなく輿論の暴君を恐れず。殊に自分の魂を覗き込み、よくそして長く覗き、默想の中にその深奥に沈潛することを努めよ。かくするものは次にその見た所を表はさねばならぬ。この自己省察は利己的人格の中に自己投獄をすることではない。これをなすものは自分の屬する國民の本性の底深き大根にぶつつかるだらう。私は諸君がその國民の苦惱と希望とに充分に與るよう努力せんことを奬める。この世界を新しくする使命を帶びておる大群衆の暗愚を照す光となれ。普通の人民は男も女も、藝術に關する趣味を缺いておるので屢々汝等の厄介物であつたが彼等は啞である。彼等は表現の能力を缺いておるので自分自身を知らない。彼等の聲となつてやれ。彼等は汝等の聲を聞く時自分自身を知るやうになるだらう。自分の魂を表現することによつて、國民の魂を創造し得るだらう。



諸君の第二の更に廣く遠き仕事は此等自由なる各個人の間に友愛關係を作り、薔薇形窓を作つて雜多な傾向を一點に集め、色々の聲を以て一交響樂を作ることである。合衆國は世界各國民から引き出した要素を以つて成つて居る。この構成の豐富なることを以て各國民の本質を了解し智力の調和を實現するの助とならしめよ。今日舊世界に於て吾等は獨逸と佛蘭西との如く、僅かな陰影でやつと區別されるような近隣、近親の各國民が互に拮抗し互の破滅を希ふが如き悼ましい馬鹿らしい鬪爭を目擊して居る。蝸牛角上の爭！　その爲めに人心は自殺を就けんと心を熱くして居る。私としては、一國民の智的理想は私にとつて餘りに偏狹であると聲高く叫ぶのみでない。私は西世界和合の理想も私にとつては餘りに偏狹であると宣言する。私は全歐羅巴聯合の理想も尙ほ偏狹なりと宣言する。今や人類は眞に健全に眞に活潑にその足先を全一的人類の理想の方に向けねばならぬ時が來た。かくて新舊世界の歐羅巴人が古き而も若返らんとしておる亞細亞—印度、支那—の文明の代表者達

と手を聯ねるであらう。共通な精神的寶を有する全一的人類、これ等色々の型の人種は皆相補足する、未來の思想は全世界の大思想の綜合であらねばならぬ。アメリカは二大陸の間に流るる二つの大洋の間に介在して居る。アメリカは世界の生命の中心に居る。この子澤山な結婚をかためることが實にアメリカに於ける最もよき人々の使命である。

要するに吾々は諸君アメリカの操觚者、思想家に對して二つの要求をもつておる。第一吾々の要求することは諸君は自由を防護せねばならぬ。その勝利を確保し、之を擴張せねばならぬといふことである。政治上の自由と精神上の自由、この自由を通過して、この大きな絶えず流れる心の川を通じて生命の不斷の革新が遂げられる。

第二に吾々は諸君が世界の爲めに色々の自由の諧調—結合したる個性の、結合したる諸民族の、結合したる諸文明の、完く且自由なる人類の、交響樂的表現—を來さしめんことを諸君に期待して居る。



諸君は素敵な機會を有して居る。春秋に富み、廣い未墾地を有して居る。諸君の日は今始まつたばかりだ。諸君は過ぎし日の勤勞に疲れて居ない。又過去の傳統の爲めに不具にされて居ない。過去よ　諸君の上に降つて來る一切のものは數多き流の音のやうな音である。偉大な先驅者の聲である。その人の著作は汝を待つておる仕事を預表するやうに見える。私のかく云ふは、亞米利加の大家、ワルト・ホヰツトマンである。—Surge et age.

一九一七年二月ゼネヴア „Revue mensuelle."

## 十二　亞米利加よりの自由の聲

私は戰爭中屢々瑞西の新聞紙がその課せられた大任を完ふしないのを歎じた。私はこの歎息を私の親しい瑞西の操觚者に漏すのを躊躇しなかつた。が私は瑞西の新聞が公平を缺いておるのを責めたのではない。一體選り好みをしそれを感情的に表はすのは當然のことであり、人間的なことである。況んやその選り好みたるや、吾等に味方（少くとも羅典瑞西の間に於ては）して居るのを見ると吾等は苦情を云ふべき理由は毛頭ない。

私の主として悲む所は戰爭開始以來吾瑞西の友人等が吾等の周圍に起つておる事柄を吾等に充分知らしめて呉れなかつたことである。吾等が情に激しておる時は吾等は友の方が吾等よりも分別があらうなどとは思ひもよらぬから、友に、吾等の爲めに判斷をして呉れとは求めない。けれども友が吾等には隱されておる事柄を見も



し知りもして居ながら吾等には知らさないで放つて置くなら、吾等は充分批難する權利があると思ふ。彼の手ぬかりの爲めに吾等は誤斷に陷り不正を爲さんも計り難いからして彼は吾等を損ふものであるから。

中立國は多くの利益を享有しておる。彼等は戰爭の色々の問題を交戰國民には到底不可能なような方法で正面から見ることができる。就中中立國民は自由に論ずることが出來る利益をもつておる。これは實に大きな寶であるが彼等はその眞價を知らない。瑞西は戰場の眞唯中にあり、戰陣の間に介在し、三つの交戰口から引き出された人民を有しておるので特に便宜がある。私は瑞西が意のまゝになる澤山の消息を利用するの機會を得た。瑞西へは歐羅巴の各地から報知、實見談、印刷物が澤山來る。

然し瑞西の新聞紙はこの澤山のものを利用しない。二三の例外を除いては瑞西の新聞雜誌は軍隊より來る官報や疑はしい筋から出す半官の報告や又は當局、若しく

は當局の表面上の頭目よりもずつと強い支配力を有する隠れた有力者の内意をうけた報告やを再錄することを以て滿足して居る。吾等は瑞西の新聞紙がこれ等の不公正な報道を批判論評したことを見ない。吾等は反對する意見を聞かない。吾等は相反對せる塹壕から出る獨立の聲を聞くことができなかつた。かくて權力者の書き取らせた官製の眞理が獨斷の力を以て群衆の上に推しつけられる。戰爭に關する思想は異敎の存在を許さない加特利性を有して居る。かくの如き狀態は瑞西に於ては殊にゼネヴァ州に於ては奇異なことである。その州の歷史的起原、及存在の理由は反抗の自由と異敎の胎育にあつたのに。

私は官製の獨斷に反對する思想を壓迫せんとすることの心理的原因を探究しようとは思はない。私はこのやうな事柄については黨派的の感情はさほど影響するものではなく寧ろ或る場合には事實を知らなかつたり批判の能力を缺き、或る場合には實際に通曉した人も證明された事實の確認を誤つたり、又は極端に走つて居る輿論



の誤謬—實際自ら知らず〳〵その誤を信ぜんと欲して居る—を正すことを欲しない心があつたりすることがもつと大きな影響を及ぼすものだと考へたい。大きな御用商人が家毎〳〵に供給する報知を以て滿足して居るのは自身で苦心して源泉に出かけて行き末流に行はれて居る消息を檢査し補ふのに比して頗る容易であり同時に又安全である。

これ等の誤謬と此等の缺陷とは公衆が既に實感し始めて居るが故に、如何にして始まつたとしても重大なるものである。或る交戰國に於ける彼或は此れの社會的又は政治的の黨派の理想が中立國に於ける彼或は此の雜誌の理想と相衝突することは至極自然のことである。かくの如き中立の雜誌が公然と意見を異にせることを表明することも驚く必要はない。用心深い批評は同樣に適當にその處を得る。然し中立國の雜誌が自分の承認しない事實を不問に附し又曲解するのは許すべからざることである。

例へばロシアの革命については政府筋（大概反ロシア）か又は先に進んだ人々を中傷するに熱心な敵黨から出た消息による外何事も知ることが出來ないといふことは我慢の出來ることであるか？　瑞西の大新聞が罵られた人々、マキシム●ゴルキー―その天才と智的明晰とは歐羅巴文學界の榮である―の如き人の場合に於てさへも論壇を公開しないといふことは忍ぶべきことであるか？更に佛蘭西の社會主義者が故意に畫面から除かれ、佛蘭西語を話す瑞西國の新聞に存在を認められて居ないと云ふことは堪へ得られるだらうか？　此等の同一新聞雜誌が過去三年間英國内の反對の聲に關して全く沈默を守つた、よし言及したにしても最も侮蔑した言葉でしたといふことは奇怪なことではないか？　吾等はこの反對の聲をあげた人々は英國思想界に於て最も偉大なる名聲を有する人々例へばベルトランド●ラッセル、バーナード●ショウ、イスラヘル●ツワングウィル、ノルマン●エンゼル及イー●デーロモーレル、である事を記憶せねばならぬ。それ等の意見は勇氣ある新聞雜誌や數多の小冊子又



は書物に掲載せられ、その或物は同じ頃フランスやスキスで書かれた何れのものよりも價値の多いものであつた。

それにも拘らず、長い間に英國内の反對の聲はその持久力によつて國民的境界に打ち勝つた。この反對の思想はフランスに進み入り、フランスに於ては主だつ人々は今やその英吉利の仕事イギリスの爭鬪に氣づいた。殘念ではあるが瑞西の新聞雜誌はこの相互の了解を進捗せしめるのに少しも役立たなかつたことを記さねばならぬ。そして私は佛蘭西も英吉利もこの事實を忘れないだらうと思ふ。

同じ事が亞米利加にも起つた。瑞西の新聞雜誌は權力者が刊行せしめようと送つて來たものを何でもかでも喜んで公にした。そして反對者の聲をば常に忘れ或は嘲笑つた。或る機會に偶然に紐育發の半官の電報が用心深く轉載せられて（わざ〳〵解釋を附し煽動的な見出しを附し）反對者に言及した場合には吾々は侮蔑を感ずるばかりである。大西洋の向側でも自ら平和論者なりと公言する人があれば、たとひ

基督教の根據に立つて居ても、敵に備はれて働く賣國奴と見られるだらう。我々はこれに驚かない。過去三年間の試驗をして來た吾等には何事も驚くに足りないほど甚だしいことがあつた。吾等は同時に一切の信賴する力を全く失つてしまつた。眞理を求むるものはその來るを待つて居ても駄目であることを知つた以上、それの見出される所何地でも自分で眞理を探しに出かけねばならぬ。家の中に飲料水がなくなれば、井戸の所まで行かねばならぬ。

今日吾等をして、亞米利加に於ける反對運動の爲めに、最も勇敢に盡して居る雜誌の一なる、紐育の The Masses に表はれてゐる反對の聲を聞かしめよ、

こゝには非官製の眞理が表はされて居るがこれ亦眞理の一部に外ならない。吾等は好むも好まざるも眞理の全部を知らねばならぬ。又これを知ることは吾等が現實をまともに見るを恐るゝ臆病者でない限り吾等の義務である。戰爭中に無駄にされた偉大なるものの記錄を The Masses の綴込の中より探す必要はない。これについ



ては吾等はどうかかうかして澤山の官製の報告によつて知ることができる。吾等が充分に知つて居ないこと、人民が知りたいと願つておることは物質上道德上の不幸不正、壓迫である。これは（ベルトランド・ラッセルの指摘したように、どんな正しい戰爭でもそれ〴〵の國民に對してもある戰の裏面である）—これが亞米利加に關して、吾々が次に引用せんとする非妥協的な雜誌を調べる理由である。

＊＊＊

「The Masses」の魂は主筆マックス・イーストマンである。彼はその雜誌を自分の思想と精力とで滿して居る。私に屆いた最近の二號、一九一七年の六月號と七月號は彼の筆になつた文章六篇以上を載せて居る。すべて軍國主義と盲目的國民主義に對し假借なく戰をなしておる。公の宣言などに欺かるゝことなく、彼は此の戰爭は民主主義の爲めの戰に非ずと公言しておる。自由の爲めの眞の爭鬪は戰後に來るだら

う。合衆國に於ても、歐羅巴に於ても戰爭は資本家の仕事、僧俗共智識階級の仕事であつた。

マックス●イーストマンは智識階級の演じた役割を評論し、共働者ジョン●リードは資本家の演じた役割を力説する。新世界に於ても舊世界に於ても同樣な經濟的道德的の現象があらはれた。合衆國に於ても歐羅巴に於ても多くの社會主義者が戰爭に加擔した。彼等の中の若干（特にエプトン●シンクレアーこれは私　個人的に親密でありその道德上の誠實と理想家的精神は私は充分に尊重しておる）はこの奇怪な軍國主義を採用した。彼等はこの『民主主義の爲めの戰』の後社會主義運動は協働的國家を建設する場合にその訓練された軍隊を用ゆることが出來るだらうと望んでこの世界的徵兵を擁護した。

宗教に携はる人はと見ると彼等は向ふ見ずに戰に跳び込んだ。紐育に於けるメソヂスト牧師　會合に於てその中の一人コンネクチカット州・ブリッヂポートの一牧



師は直截に『もし私が國家と神との一を選ばなければならないとすれば、私は神を選ぶことを決心した』と公言した。彼はその會合總數五百の人々から嘲られ威嚇せられ遂に賣國奴として摘發された。ニューヨル●ヅウヰト●ヒリスはヘンリー●ワード●ビーチャー教會で說教して『宥恕に關する神の一切の敎は獨逸に對しては取消である。もし獨逸人が銃殺せられた時には私はその兇暴を宥してやる。かもし戰後吾々が獨逸を宥すことに同意するとしたら私は世界は狂したと云ふだらふ』といつた。

ビリー●サンデー—一種の常に咆哮せる苦行僧—は何處かしらから飛んで來て大群衆に軍國主義の福音を吼えて居る。彼は下水が汚穢物を吐き出すやうに說敎を吐き出す。彼はよき昔よりの神（たしかにベルリンの近傍の何處かに居さうな）を呼び求め、否應なしに引き止め籍に入れる。ボードマン●ロビンソンの諷刺畫にビリイ●サンデーが徵募軍曹の服を着け基督に絞首索を引きかけて『捕へたぞ！　貴樣は戰爭に引つぱつて行くぞ』と叫んで居るのがある。流行を追ふ人々は婦人でも皆

此の說敎者に夢中にせられる。彼等は自ら神の仲間に入ることを喜んでおる。宗敎家達は皆ビリー●サンデーの味方である。除外例は片手の指を屈する丈しかない。この除外例の中で最も有名なのは紐育のメサイアーの敎會の牧師なるジョン●ヘインズ●ホームズと稱する人である。この人から私は一九一七年二月亞米利加が戰爭に參加する少し前にすばらしい手紙を受け取るの光榮を有した。「The Masses」の七月號にホームズがその敎會員に與へた宣言書が公にされて居る。それは『余は何を成すべきか』と題しておる。彼は人類社會が何れの國民をも除外することを拒む。メサイアの敎會は一切の軍國主義的の叫に應じない。彼の良心は徵兵を拒絕せんことを强ふる。彼は如何なる價を拂つても良心に從はんと欲する。『神は自分を助ける、自分は他の道をとることは出來ない。』—戰爭の狂態に反對する人々は小さい敎會を造り一切の黨派の人々基督者、無神論者、クエーカー、藝術家、社會主義者等皆相提携する　コンパスの各點から來り、最も相反する理想をもちながら、唯一つの信仰



個條—戰に對して戰ふとの—を共にして居る。この共通な信條こそ彼等を、昨日の友、血を別つた兄弟、宗敎上、職業上の友が結んで居た團體よりも、ずつと緊密な團體たらしむるに充分である。かくして基督は彼を信ずる人々をその家族よりその階級より、その過去の生涯より解放しながら、ユダヤの人々の間を彼方此方に經廻り給ふ。—アメリカに於ても歐羅巴に於ても若き人々は老人達ほど戰爭の魔にとりつかれて居ない。コロンビア大學に著しい例がある。同大學に於てジョッフル將軍に文學博士の稱號を與へんとして居た時一方學生達は徵兵の招集に應じないことを全會一致を以て決議した。この人々は禁錮の刑に處せられた。彼等は此の自由の由緒ある土地で高壓的に事を行つた。多くの亞米利加の市民は戰爭否認を表明した廉で行手に投げやられ他のものは癲狂院に投込まれた。徵募軍曹は氣の向くまゝに何處へでも行き、甚しきは勞働者の集會の中に無理に入つて行き反抗するものは皆虐待した。『一週間の戰爭』といふ題で The Masses は已に亞米利加內で行はれた一切の

殘虐、格鬪、負傷、殺人等を記錄して居る。これ等反平和論者は暴行がどれほど極端になつて來た場合に之を制禦しようとして居るのであるか問ひたいものである。合衆國に言論の自由ありと言はれて居るのは全くの詐僞である樣に思はれる。マックス●イーストマンは叫ぶ「事實上言論の自由は全くない」それは法によつて定められて居る『が然し實際に法律は蔑視されて居る。その結果强き者は利し弱き者は損して居る。』我等はこのことを既に前に勞働者に課せられた凌辱的判決と關係して伊太利とロシアの社會主義者が曝露したことによつて知つておる。平和論者は何の不都合をなすか。彼等は無政府主義者として拘引せられる。新聞雜誌が國家の意見に頭を屈することを拒むか？　相談もなしに壓迫せられる。或る時はもつと巧妙な手續で、醜行の簾で處斷せられる。このような具合である。

マックス●イーストマンの主なる共働者ジョン●リードはこの戰爭中アメリカの資本家が演じた卓越せる役割を闡明するに努めた。ノルマン●エンゼルの書名「大眩



想」と同一の題を附した文章中にリードは、戰つておる王達の得る所は泣虫だけである。そして眞の王は金だといつておる。彼は急所を突いて、アメリカの大會社が儲けた莫大の利益を引證しておる。『アメリカの肥つた嘶』といふ奇妙な題の下に彼は戰爭で肥えたのは歐洲人の想像する樣にアメリカの國民ではない、唯その人口の百分の二であることを示した。國民の九十八パーセントは瘠せた國民で日々益々瘠せておる。一九一三年から一九一六年まで賃金は九パーセント增したが飲食費は一九一五年から一九一六年の間に七四パーセント騰貴した。一九一三年から一九一七年まで一般物價の騰貴は八五パーセント三二である（麥粉が六九パーセント、卵が六一パーセント、馬鈴薯が二二四パーセント！　一九一五年から一九一七年一月まで石炭は一噸五弗から八弗七五に騰貴した）人口の大部は殘酷に苦しんだ。そして大なる飢餓の爲めのストライキが紐育に起つた、勿論歐羅巴の新聞雜誌はこれについて何も語らず或はこれを獨逸の陰謀に歸した。

一九一四年から一九一六年の間に二十四の大會社（銅鐵、鑄鐵。皮革、砂糖、鐵道、電氣、化學製品等）の配當は五百パーセント增加した。ベツレヘム銅鐵會社の配當は一九一四年の五、一二二、七〇三弗より一九一六年には四三、九五三、九六八弗に增加した。合衆國鋼鐵會社の配當は一九一四年の八一、二一六、九八五弗より一九一六年には二八一、五三二、七三〇弗に增加した。一九一四年から一九一五年の間に於て合衆國の富者の數は次の通り增加した。百萬弗以上の收入ある者六〇人が一二〇人に、五十萬弗以上百萬弗の收入ある者一一四人が二〇九人になつた。が十萬弗以上五十萬弗の收入ある人の數は二倍になつた。十萬弗以下の收入は注意すべきほどの增加をしなかつた。ジョン・リードは附け加へて『普通の人間の堪忍袋には度がある。革命に氣をつけよ』といつておる。

The Masses の七月號の卷頭の文は有名な英國の哲學者にして數學家なるベルトランド・ラッセルの書いた『戰爭と個人の自由』と題する亞米利加市民に與ふる文である。それは亞米利加が宣戰する前一九一七年二月廿一日の日附になつておるが七月まで公表されなかつた。ラッセルは英國に於ける良心ある反對者の犧牲とそれ等の受けた迫害とを思ひ起さしめる。彼は彼等の信仰（彼自身もその信仰の爲めに苦められた）を歎稱する。個人的自由の動機は一切の中最高であると彼は云ふ。中世以來國家の權力は絕えず成長した。今や國家はその意見を一切の男女に指圖する權利ありと主張される。罪人は皆殺戮に從事する爲めに軍服を着せられて戰線に送り出され、空つぽになつた獄舍は、兵士となり人を殺すことを拒む正直な人で充たされた。謀反の餘地のない壓制な社會は前以て役立たないことを宣言せられた社會である。殊にその進步は止められ退步的となる。中世の敎會は少くとも、均量として、フランシス團と改革者の反抗を有した。近世國家はその力に反對するものを一切破つた。それは自分の周圍に自ら亡ぶべき空隙、深淵を作つた。軍國主義は近世國家の壓迫の道具である。丁度敎義が敎會の道具であつたように。その前には一切のも

のが畏縮する、この國家は果して何物ぞ。それを非人格的の權力と云ひ、それに半神聖の人格を與へるのは如何にも不合理である。國家は二三の大部分は通常の能力以下の――といふのは彼等は民衆の新生活と切りはなされて居るから――元老紳士で出來ておる。今日迄合衆國は各國民の中で一番自由であつた。今や自身にとつてのみならず、非常な心配を以て見ておる世界の爲めに危機に達しておる。亞米利加覺めよ。正義な戰爭でもすべての不正を起らしめる。古の狂暴の痕跡は、吾等の中に居る動物性は、闘士の格闘を見ると喉を鳴らして居る。吾等はこれ等の肉食の貪慾を正義と云ひ自由と云ふ高く響く名の下に掩ひ隱しておる。吾等の最後の望は青年に かゝつておる、青年をして將來、善惡を自ら判斷し自ら自己の行爲の處斷者となる各個人の至上權を要求せしめよ。

これ等眞面目な文章と並んで、思想の戰に關して輕妙な美しい武器をつけたユーモアが大部分を占めて居る。チャーレス●スコット●ウッドは面白いボルテールの對



話を書いておる。ビリー●サーデーが天國を喧騒でうづめておるのを見る。彼は下司言葉ばかりの說敎をして居る。溫和なそして目立つ身態をし少し疲れ靜に語る老いた紳士であらはされた神に對して說敎しておる。ペテロは神の爲めに新しい儀式を執行するやう命ぜられた。單純な魂等と友となることの無趣味なるに飽き果て、將來は智識階級の人々のみを天國に入れようと決心する、その結果戰爭で殺された者は一人も天國の門を通らない。唯犧牲とせられたことを犧牲とも思はず自分の意思に反して犧牲とせられたと云つて居るポーランド人ばかりである。

ルイス●ウンテルマイヤーは詩を寄稿しておる。優秀な書物の批評二三と、敷欄に亘つての劇評とは時事問題を取扱つておる。批評しておる書物の中で二つの大に創意あるものを書いておく。一は「平和？　平和の性質に關する考察」と題しソルスタイン●ヴェブレンの書いた大膽な奇論で充された書物。一つはアルツバイシェフの四幕物のロシア劇で一つの家族の中の戰爭の一段とそれが惹起した魂の浪費とを敘

逃して居る。

最後に力ある書、鉛筆の諷刺畫がある。アール●ケンブフ、ボードマン●ロビンソン、ジョージ●ベロウスは、その幸辣な畫面と痛烈な文字を以て雜誌に活氣をそへておる。ケンビスの畫に戰爭が佛蘭西、英國、獨逸を抱いて打ち碎きながら『來れ亞米利加、血は美しい』と叫んでおるのがある　四つの手を繫いだ人物が死骸の浮いておる血の海邊で躍つておる—二三頁後にはボードマン●ロビンソンの畫がある、自由が後の方で泣いて居る。前の方にはサム叔父さんが立つて居る。手錠(檢閲)と足かせをはめその鎖には徵兵といふ大砲の丸がくつついておる。彼は『自由の爲めに戰はんとして用意なれり』と書いてある。ジョージ●ベロウスの畫は獄中に繫がれたキリストをあらはしておる。彼は『市民を合衆國の軍隊に入らないやうに奬める言葉を使つた爲めに投獄』せられて居る。最後に堆高い死人の上に唯二人の殘存者が野蠻らしくお互に寸斷〳〵に切り合つておるのが見られる。それは土耳古と日本で



ある。說に曰く『一九二〇年、尙ほ文明の爲めに戰ふ』これはエッチ●アール●チャンバーレンの構圖である。

＊＊＊

かく海の彼方に二三の獨立な魂は戰ふ。自由、明晰、勇氣、ユーモアは稀な德である。この馬鹿な奴隷の時代に彼等が相結んでおるのを見出すのは尙更に稀しいことである。亞米利加の反對者の中ではこれ等の諸德が卓越しておる。

私は反抗が公平無私だとは云はない。それも亦同樣に情熱に驅られ易いが故に相手の側を動かしておる道德的の力を見逃し易い。此の悲劇的な時代の不幸であり又一方偉いことは、何れの側も—相反しては居るけれども—高い理想によつて戰に引き出されて、ホーマーの英雄のように互ひに彈丸を浪費して互に殺さうと努めて居る事實である。吾等は少くとも敵に對してさへも我等の好まない戰爭の義士に對し

ても正しいことをなすの權利を要求する。この極惡な事件の爲めに如何に多くの理想主義が、如何に多くの緊張した道德感が注がれたかを知つておる。この點に關しては亞米利加も英佛同樣浪費者であつたことを知つておる。吾々は他の側、平和な人々から來る聲を傾聽するよう人々に願ふ。平和の使徒は少數であり、壓迫せられて居る、故に殊更世界の尊敬を要求する權利がある。萬事が——武裝國家の强い力や新聞雜誌の吠哮や盲目な醉ぱらひの輿論の狂亂や——この大膽なる人々に反對の威を逞しうする。

世界が意の儘にわめき、好む通りに耳をふさいでよろしい。吾々は强いて世界をしてこれ等の聲を聽かしめる、吾等は世界をして初代基督敎徒がローマ帝國に對してなした鬪を思ひ起さしめるやうなこのヒロイックな鬪爭を尊敬せしめる。吾等は世界をして新しい使徒パウロ、ベルトランド・ラッセルの如き人の『亞米利加人へ』の兄弟らしき挨拶を尊敬せしめる。吾等は世界をして魂の自由なる人々、歐羅巴の



獄舍の中と、亞米利加の囹圄の中とから海を越へて人類の愚蒙といふ海、大西洋よりももつと廣い海を越へて互に手と手と握り合ふ人々を尊敬せしめる。

一九一七年八月

一九一七年九月 (Demain.)

# 十三　イー・ヂー・モーレルの爲めに

イー・ヂー・モーレルは民主的統制同盟の秘書であつて一九一七年八月中倫敦で逮捕せられ第二延に於て六ヶ月の禁錮に處せられた。その理由は可笑しな(不正な)ものである。英吉利では自由に頒布されて居る自分の政治上の小冊子の一を瑞西に居るロマン・ローランに送らんとしたと云ふのである。ゼネヴアの「Revue mensuelle.」誌は、ロ、ロ、にこの事件を如何に思ふかと尋ねた當時この事件については大陸については何も知られて居なかつた。それは今まで公にされた報道は皆英國官憲が作製し各國語に譯して配布した誹謗ばかりであつたから。ロマン・ローランの答は次の通り。

イー・ヂー・モーレルの逮捕について如何思ふかとのお尋ねであるが、私はイー・ヂー・モーレルとは個人的に親密でない。確言せられておるように戰爭中に彼が私にその著作の或るものを送つたかどうか私は知らない。私は受取つて居ない。

然し彼の人格なり、彼の戰前の活動、彼の阿弗利加に於ける文明の罪惡に對する十字軍、彼の戰爭に對する述作（その中の二三は瑞西、佛蘭西の新聞に再錄せられ



た）等について私の知れる範圍から推すと、彼は大に勇しき強き信仰の人であると思ふ。彼は常に敢然として眞理に仕へた。否眞理にのみ仕へた。そして危險を物ともせず、憎まれることをも意に介しなかつた。此等は些事である。モーレルはその稀な素質をあらはし、困難な仕事を成就した。それが爲めには彼は自分の同情も、友情も、又もし眞理と國家とが相反する場合には國家をも顧みなかつた。

かくて彼は實に偉大なる信仰家の後繼者である。初代の基督者、宗教戰爭時代の改革者、自由思想英雄時代の自由思想家、これ等は總て萬事に優つて眞理—どんな形でも自分の心（人間的でも神的でも、彼等にとつて心は常に神聖であるから）に表れた眞理—に對する信仰を重んじた人々である。私はイー・ヂー・モーレルの如き人々はその國家が陷つて居る過誤をデモンストレートして居る時でも立派なる國民たることを失はない事を附言したい。否、彼がこれをなす時こそ、これをなすが故にこそ特に立派なる國民である。或者は國家の過誤をば布で掩蔽する。かくの如き人は無益な公僕であり阿諛者である。

勇敢なる人、直截なる人は如何にして國家を尊敬すべきかを知つてゐる。

國家はかくの如き人々を氣儘にたゝき殺した。丁度國家がソクラテスを殺したやうに、又國家は多くの人を殺しておいて死んだ後になつてその人の爲めに役にも立たぬ紀念碑を立てた。かくの如き國家が吾等の祖國ではない。それは單に吾國の爲政者である。ある時はよき爲政者であり、ある時は惡い爲政者である。そして常に誤り勝である。國家は權力を有し之を使用する。然し人間が人間となつて以來此の力は常に自由な魂の闘で空しく碎かれた。　ロ、ロ、

一九一七年九月十五日

一九一七十月　ゼネヴア　(Revue mensuelle.)



## 十四　若き瑞西

もし吾等が瑞西民心に關する意見を瑞西新聞紙に基いて定めんとすれば甚しい誤に陷る。この國に於ても他國と同じく新聞紙は人民の智的道德的發達より　年も二十年も遲れてゐる。瑞西の新聞も雜誌も隣國に比し頗る少數である。その大部分は全く少人數の團體によつて支配せられ、殆んど全部偏見や、私利や、中老又は老年のお掟主義を表明するにすぎない。此の記者界に有力な人々の間では嘗て心が若かつた時若いと云はれた人々はその元老連中の目には今も尙ほ若い。元老連中はその人達が年老つたことを承認しない。丁度ジョブがマグナスに云つたやうに『若い者は默つておれ』と云ふ。※

※ヴキクトル・ユーゴー。『ブルグラーブ家』といふ小說に就いて云つたのである。ブルグラーブ・ジョブは八十歲で息子ブルブラーブ・マグナスは六十歲である。

瑞西に長い間住つて、やつと瑞西にも保守的自由派（自由派よりもつと保守的）の束縛を脱し教派的急進派（主として教派的）の束縛をも脱したる若き瑞西のあることを發見した。この兩派の趨勢は主なる新聞紙面に澤山にあらはれて居る。これ等の與黨は歐羅巴の片隅から衰亡しかけて來た役立たないブルヂョア政治の政治上社會上の形式にくつついておる。

私は「ツォーフキング協會評論」の最近號を讀んで驚き又喜んだ。私は佛蘭西の友に私の學んだ所を知らしめ、かくて佛蘭西と若き瑞西との間に同情的關係の成立せんことを希望する。

ツォーフィング協會は瑞西の學生殊にその最年長者の主導せる會である。一八一八年に建設せられたので來年はその百年祭を祝ふことであらう。十二部會に別れている。その中の九つは大學卽ちゼネバ、ローザン、ニューシャーテル、ベルヌ、バール、チューリッヒにあり。三つは高等學校卽ちサン・ゴール、ルチエルン、ベリンゾナ



にある。會員は常に增加して居る。一九一六年七月には五七五名であつたが一年後の今は七〇〇名ある。この團體は每月佛、獨、伊、語で『ツォーフ*ング協會中央評論』なる評論雜誌を出す。この雜誌は今その五十七年目である。講演や討論の報告や其の他會に關係ある色々の事柄を載せておる。

この團體と他の瑞西學生の團體の主なる差異は、ツォーフ*ングはその規約第一章に規定して居る如く『一切の政黨を超越するが但し民本主義の上に立ち全く政黨と關係しない』ことである。かくして（その首領の書いてゐる所に從へば）この團體は瑞西の學生に日々新又新に『眞に瑞西の國民精神』を創造するの永久的力を與へる。……『この眞の瑞西の國民精神の中にあつて各時代の人は自分に適する新しい理想を自由に考へ出し新しい生活の樣式を形成することが出來る。かくてツォーフ*ング協會の歷史は單なる瑞西學生倶樂部の歷史ではない。それは一八一五年以來の瑞西の道德的政治的發達の歷史の縮圖である』いつもそれが前衛であつた。

ベリンゾナ又はチチノの部會は最近一九一六年十一月に設置された。開會式に當つて會長ユリウス・シュミットハウゼンの試みた演說は優秀な歐羅巴の音調を響かせた。彼は瑞西の三民族の結合を歷史前の時代の有樣で生活して居る現代の歐羅巴―佛蘭西人は獨逸人を敵とより外見ず獨逸人は佛蘭西人を敵とより外見ずそしてお互ひを人間として見ることが出來ないやうな歐羅巴―の現狀に比較した。『我々は瑞西ではすべての人種に人間的要素を見出すの道を知つてゐる。』一九一六年十二月ツオーフキンゲ協會中央評論」

この協會の會員は三民族九州より出でて居るので、想像せられる通り、一に於ける多を呈して居る。中央評論の一九一六年十一月はルイ・ミセリー編纂の一九一五―一九一六年の報告を載せてゐる。それは各部會の活動を記し各部會の特長を巧に表はして居る。

最も重きをなし、ツオーフキングを指導して居るのはチューリッヒの部會である。そこでは時事問題が特に熱心に論ぜられた。こゝには二つの黨派があり反對の立場に立ち數も同じく熱心も相劣らぬ。一方は保守的・官僚的、中央集權主義的傾向を有し



舊式な學生氣質の歸依者である。他の方は若いツオフキングでその見方は社會主義的理想主義的革命的である。暫くの間兩黨の間に激しい爭があつた。兩黨相繼ぎ相代つて權力をもち、或期間支配權を得た方は前の期間に前の委員會のなした所を一切壞すのであつた。今はも少し妥協的精神が勝つてゐる。[※1] が進步黨は若い新入生の援助があるので優勢である。尙ほ見解を寬やかにし寬容の政策によつて、附加分子を引きよせ更に大なる援助を得ようとしてゐる。[※2] 然し『チューリッヒ人は根本に於ては强い個人主義者ではない。』と云ふのがある。

『といふのは彼等は黨派の祭壇に個性を犧牲に供するからである。だから時々專制主義が復活し得る危險がある』

※1 本文章は一九一七年の夏書かれたものである。その後ツオーフキンゲの內部に軋轢が起つた。この不和はロシアの革命以來甚しくなつた。

※2 新委員會の (Der Centralausschuss an die Sektionen) プログラムは一九一六年の中央評論に公にせられ、十月十九日の Journal de geneve. に一部分が Le programm de la jenuesse といふ題で再

錄せられた。このプログラムは超國家主義と反帝國主義の信仰を次に本文に出てくる議論の中で說明された數行の中に確認してゐる。私はプログラムから引用しよう。『吾等は吾等の好戰的過去の崇拜の上に生活しない。吾等は力による領土所有、物質的の偉大、國威などを目的とする大帝國主義的國家の組織の中に位して居るけれども、將來を信賴して。帝國主義に反對し人道の理想の爲めに公正に、大膽に戰はねばならぬ。

社會問題に關する又一般人民卽土地を相續する權利を有しない人の共存に關する熱心なる興味が明に表はれてゐる。

バールには斯くの如き危險はないやうである。この部會は最も大きく最も活潑であるが最も結束ゆるく最も一致して居ない。過去數年の間に愛國問題の爲めに起つた不和の爲めに散々になつた。がその會員はチューリッヒ部會の如く兩黨には別れない。が少さい徒黨に別れ壕壁を設け互に相嫉視する。その最も著しい特性は次の如くである。その議論が最も激しく行はれるので『色々異つた理想の王國に對する傾向が强くて遂に個人的の敵意を生ずるに至る』バール人は實際的活動を好まないで



寧ろ抽象的議論を好む。彼等は品性と個性の發展を目的として居る。『これ等の點に於てはバールとローザンとは最も創始的な個人的な典型を有する部會である。然しローザンと比べるとバール部會は文明的美術的問題に興味を有しない。

ローザン部會には個人的典型が澤山ある。一番色々の氣質をもつた學生、又一番色々の問題、政治、社會學、文學、美術に興味を有する學生が居る。がローザンは喧嘩好きで、他の部會に比して惡い狀態の下にある。多くの徒黨に分裂し分離主義の傾向を示して居たが遂に一九一六年の初め危機に到達した。ボウ (Vaud) 流に云へば人交りを避けて居る。

ローザン、バール、チューリッヒは最大の部會である。

ルチェルンとベルヌは最小である。重要視されない前者の中には『遲緩な深切』の風が行はれてゐる。ベルヌの部會には後繼者も少く少數であるばかりでなく眠氣が漲つてゐる。その會員の一人はベルヌに官吏町の名を附して之を侮辱した。ベルヌ

部會は殆んど近代生活の問題に興味を有して居ない。その愛着するのは常識である。物質的で非感情的である。既成制度を愛する。ベルヌ人はその性質、改革者や理想家を信せず、彼等を夢想者、革命家なりとする、ベルヌ學生の心の狀態は官界の空氣を思はしめる』

サン●ゴールは熱心に働き、熱情あり獨立的であつて中流の地位を占めておる『サン●ゴールに於ては各自その意見を包み隠しなく發表する。』がチューリッヒやバールの如く重要な部會ではない。ニューシャーテルは不規則に精力を出す、そして『その根本的特性はある自然的隋力である』最後にゼネバは無定形である。『この部會の會員數の大半は何等定まつた意見を發しない人々の眠げな無定見の團體である』そして多分何等の意見も有しないだらう。それが活動して居れば二三の例外の人の働きである。どの部會も大將らしい會頭を得る必要がある。リーダーがなくては全く據處なく夢のやうなもので時事問題にも何の興味をもち得ない。又團體精神を缺い



ておる。『ゼネバ人は非常に個人主義的である。が不幸なことにはその中に強い個性を有する人が少ない。』尙ほ彼等は古のゼネバの或る特質をあらはしておると云ひ得る。恐ろしい批評、皮肉な評論などなすことを恐れ、自分が實際に感じた所を發表するを恐れる。彼等の氣分は傷つき易い。それで龜甲のやうに冷淡を被つて居る。彼等は常に疑の態度を持しておる。彼等は常に防禦的である。恰もサヴォイ侯が常に城壁に强襲して來るのを怖れるかのやうに。

私は結論を與へない。私は只簡單に最も判斷をなす資格ある學生達の間の意見を摘錄したのみ。全體としてはこれ等の意見は私の觀察と一致する。

＊＊＊

ツオーフキング協會中央評論の最近號は自由な魂を表はしておる。一九一七年五月號にはジュール●フンベルトードロッツの『國民防禦』と題する平明な國際主義的文

章が載つて居る。一九一七年二月ローザンのアーネスト●グローアがアイベルドンの春の祭に際してなした寛弘な講演『社會主義と戰爭』は特に注意すべきものである。これは後中央評論の四月號と五月號とに公にされた。私は又グローアがローザンのグルーチリでした講演『吾國家は何ぞや』にも言及せねばならぬ。尙他にサージ●ボノートがニュージャーテル州のグルユッリでなした『祖國』と題し來らんとする時代を先觸する講演も注意すべきである。これ等の講演はそれ〴〵一九一六年十二月一九一七年一月に公刊せられた。私は「露西亞革命」に關する色々の尊重すべき論文を摘錄したい。殊に四月號からマックス●ゲルベルの熱情的な革命に對する歡迎の文を引用したい。が紙面に限りがある。でこれ等の若き人々の思想を說明するに尤もよき方法は、彼等が『大强國の帝國主義と瑞西の使命』についてなした詳細な討論を摘錄することである。この題目は中央部會の會頭で法律學生なるチューリッヒのユリウス●シュミットハウゼルが各部會に提出した。シュミットハウゼルは尤も寛



弘な綜合的精神を以て仕事に當りこの討論の報告を公刊した。殊にこの仕事は自ら「Cand. Ius.」(法律學生)と署名せる人が步兵中尉として劇しき軍務に服しておる間に書かれたものであることを見るに及んでは一層注意すべきものである。

私は單にその報告をたどつて青年の言葉そのまゝを書かう。

(一九一七年三、四、五月號)

序言、何故この問題を考究するか?

一、帝國主義の本質

二、今日の列强の帝國主義

三、帝國主義は正しきや!

四、眞正の瑞西の立場と帝國主義的立場との相反

五、瑞西の使命

六、新敎育。

## 序言、何故この問題を考究するや？

### イ。現實主義の立場より

（イ）吾々は帝國主義を歴史的産物として説明し得るか？　この方法は餘りに悠暢である。それは遲緩で危險である。『人は歴史の造つたものであるか？　否、人は歴史の創造者である』―歴史的運命論の廢棄。

（ロ）吾等は帝國主義を『實際政治』によつて説明し得るか？　もしかく説明し得るとしても同じく廢棄せられる。『私は實際政治家をば世界の本質的な實際人類に目を閉ぢて進んでおる人達だと定義する。……實際政治は或る時期の間は正しいやうに見えても長い間には惡かつたことがわかつて來る。……今日狂亂せる大戰爭は實際政治の恐ろしい誤の結果である。實際政治のモットーは Divis pacem para, bellum（汝平和を願はゞ戰鬪の準備をせよ）であつて、實に背理に終り吾等人間の上に大災害を齎した。吾等が尙ほこの呪にかゝつておることを見るのは不愉快である。實際政治の教義が多くの人の心に對して有する權力を説明し得る唯一のことはかくの如き人々は根本的に、人間の中なる善なるもの神聖なるもの現在を疑ふものであるといふことである。（シュミットハウゼル）



### ロ、功利主義的立場より

ある人々は一種の帝國主義が瑞西に危險であるとの理由の下に之と戰はんとして居るが同時に一方で他の帝國主義を辯護して居る。ツォーフキングはかくの如き傾向をば最も強い言葉で責めねばならぬ。吾等が一の帝國主義に對して立つのみならず一切の帝國主義を放逐しなければならぬ。「我等の目的は世界的人類的形勢を獲得するにある」（バール・エッチ・ダブリューロウ）

### ハ、理想主義の立場から

これ亦他と同樣である。ツォーフキングは今日の僞善的の理想論を廢する。理想論はたゞ獸的私利心の政策に衣を被せるのみである。それは抽象的理想主義の危險に

對し又現實の公平なる研究より理想を引き出すことのできない人々の理想論に對して警告をなさんとする。自分一人の理想の中に閉ぢこもる人、生命に對する空虛な思想に反對する人、周圍の事情に關係なく現實の複雜な陰影を無視して絶對的判斷(全部が然らずんば無)をなすの權利を要求する人、は危險な誇と批難すべき輕薄を表はしてゐる。

二、以上の諸立物の綜合

理想主義なしの現實主義は無意味である。現實主義なしの理想主義は血なし。眞の理想主義は全體としての生命を要求する、その完全なる實現を望む。それは人間の良心と事實とを同時に抱擁して生ける現實を最も深く知ることである。かくの如き智識が吾等の最善の武器である。

## 第一章　帝國主義の本質

帝國主義の主なる特質は權力を得んとする意思であり、膨脹せんとする希望であり、領有せんとする渇望である。それは力は正義なりとの信念に基いてゐる。それは力でおしつけることを好む。その源泉の一は選民の國民主義的精神國民主義の神秘的祭壇であり、祖國といふ神聖な利己主義である。今日は帝國主義が社會の經濟的狀態に原因して野蠻になり不埒になつてゐるが、今まで此のやうなことはなかつた。『帝國主義は資本主義と不可離の友である。各の國に於て資本主義はその主なる支柱者として勇ましい力强い國家を要する、そしてその國家は他國の資本主義と常に戰つてゐる。吾等は戰線を越へて進んで行く資本主義的政治的膨脹の傾向に帝國主義といふ名を與へる。』(グゲンハイム)『今日の帝國主義は今日の政治及社會を支配してゐる資本主義制度から出發してゐる。これが世界戰爭の原因である。(グロブ)

## 第二章　現今列强の帝國主義

ツォーフォングの中央部會は「今日の戰に參加して居る列强が帝國主義的特性を有

することは明白である』と宣言した。何れの部會も之に反對しない。彼等は『一切の列强は帝國主義的政策をとつておる』との意見に一致した。

シュミット、ハウゼルは、討論の議長として各國民は恰も歐羅巴の帝國主義的政策の網にかゝつたようなものであるから、各國民に對して公平であることを要求した。各國民の最惡の點のみしか見ない人、獨逸についてはトライチュケやベルンハルヂーの思想やベルギー占領の罪丈にしか注意しない人、英吉利についてはジョセフ・チャンバレーンとセシル・ローズの政策、ボーア戰爭の外何事をも見ないやうな人、彼はかゝる人々の偏した皮相の觀察を却けた。瑞西の使命は全體としての人類の悲劇を實感するに在り。人類の一部と提携するに在るのではない。歐羅巴の半分は頭手枷にかけられ、他の半分は道德とヘロイズムの後光を着ねばならぬといふ意見をもつておる人々は子供らしく馬鹿らしくある。(パトリー)

## 第三章　帝國主義は正しとせられ得るや



### イ、帝國主義の擁護者

唯一つのバールの部會の中に帝國主義の擁護者が居る。ワルタリンはそれの爲めに談じ、ニイチエの精神と態度を以て之を稱讃する。彼は宣言する『軍國主義は世界の動脈である　偉大なるものゝ唯一の源、一切の進歩の創造者である。……』

### ロ、帝國主義の反對者

帝國主義に對する反對の聲は他の一切の部會よりあがつて來る。大部分は帝國主義は瑞西に對する脅威であるといふことを示して滿足して居る。がシュミットハウゼルはこの偏狹な利己的な觀察を以て滿足しない。彼は帝國主義より必然的に起り來る物質上道德上の慘害を說明し、その結果世界戰爭の起つたことを說いておる。帝國主義は文明を破壞する。それは道德と法律とを顚覆する。この二者の上に人類社會は建てられて居るのに。それは人類統一の理想、個人主義の理想各人は自ら定むるの權利を有すべしとの理想。この三つの根本的理想に反對する。

## 第四章　眞の瑞西の立場と帝國主義的立場との相反

この相反の存在は討論に携はる人々によつて主義としては承認せられる。が瑞西が特に行はねばならぬ政策を考へると困難が起つて來る『吾々が特に本來瑞西的だとして呼び得るものは何か？』（パトリー）

初めに瑞西の政治上の本質を定める。第一に國家の永久中立性、第二その超國民的性質に重きを置く、クロッー曰く『瑞西の理想は國民主義の原則の上に又外に建てられた國民の理想である』第三には各個人各社會的團體の自由發展の權利に重きを置いておる。瑞西の第四の特性は、瑞西に於ては權力の前に於ても法律の前に於ても各市民、各團體、各州、各國民性、各國語等皆民本的同等權を有することである。故にこれ等の本質によつて瑞西は、絶對的に列强の帝國主義に反對する。帝國主義的原則が勝利を得んか瑞西は政治的に死する（グゲンハイム）

何をなすべきか？これ等の若き人々は瑞西は一の使命を有しておることを信じて



おる。が同時にその使命を果す丈の能力を缺いておることを自覺して居る。彼等は謙遜して『歐羅巴人に對してパリサイ派たらん』とするの希望を拒絶した。彼等は瑞西の夢想（今日あるが如き瑞西ではないけれども）の基調をなす諸原則の優秀なることを信ずると同時に『吾等は』パトリーが云ふ『善と美が一國によつて專有せられ、その國のみがこれ等の天惠の祖國となるの新しき例であると想像してはならない』吾等は土地は既に建築の用意をして居るが尙ほ爲すべき仕事が多いことを知つて滿足しなければならない。

『今此の時に當つて瑞西の運命は默示せられた。國民主義の原則が惡魔の魅入る力を以て歐羅巴の現狀を支配しておる時、相反する文明が互に相爭ふ時、吾が小さき國は色々の國民性を支配してそれ等をすべて友とする國民的理想を有するの名譽をもつておる。これは狂氣じみて居るのか？　現在の理想の爲めに將來の理想が掩はれておるやうな物知り顏な懷疑者には狂氣じみて見えるだらう。がほんとに利口な

人、世界の大きな事件がその初めに十字架に釘づけにされたことを知つておる人々には狂氣じみて見えない。國民主義の原則はその時代には善をなす力であつた。がそれが自由や寛容の要素でなくなり憎惡の原因旨目的な無制限な國民的利己心の原因となつてからは自分の破滅の爲めに計つておる。國民主義の原則をより健全に適用する爲の道を備へるのが瑞西の使命である』(クロッツー)

『この範圍に於ては吾等は勝利者であり得るし又あらねばならぬ。我國の歴史的起原により、瑞西が三ケ人種と三ケ國語を包容しておるの事實より吾等は小規模に歐洲合衆國を預表する。一言にして掩へば我等は國際主義を實行するのである』(パトリー)

瑞西は元來貴族的反動なる帝國主義に反對すると同時に、各國民の權利を擁護し民本的思想を擁護する。帝國主義は民本主義を利用し之を奴隷とする。それは近代國家の民本的柱を顚覆する。それはすべての權力を一政府の手に集中する。吾等は



執政官の時代を再興して居る、全世界が自由を叫ぶその時に全世界は奴隷とされて居る。こゝに痛ましい皮肉がある。各國民をしてその眞の運命を捨てしめる帝國主義を倒せ!

若し正義と眞理とを味方にもつておるならば吾等の國の大きさは問題にならない。吾等は新しい瑞西が今まで不充分になして來た所のものを知つておる。……然し聖き火は我等の口の中に燃え初めた。……瑞西は未來に到るの大道である。……吾等は大眞理の支持者であるとの崇高な信念と感情とを以て勇氣づけられ結合しておる。(シュミットハウゼル)

## 第五章　瑞西の使命

瑞西は主義によつてのみ偉大なものを就げ得る。瑞西に許されて居る唯一の勝利は理想の國に於ける勝利である。』(クロッツー)

吾等はこゝに選ばれた智識階級の義務のみを論ずるのではない。論題となれる問

題は、これ等の若き人々が奉仕して來た一般の人民に關係して居る。新しき精神、積極的な信仰が必要である。この戰爭は瑞西の性格の弱點を明にした。戰爭の當初國家のとつた態度に關して誠意ある此等の青年の感じた恥辱は甚しいものであつた。彼等は主義を曲げたことによつて個人的に傷けられた。ベルギーが侵略せられた時に、國民的一般的の抗議の揚らなかつたことを苦しくも見て彼等は瑞西魂の廢滅を强い言葉で批難した。が今は精神が變つた。吾等は若き男らしき運動を有して居る。瑞西の單なる存在を以て滿足しない人々、瑞西はその道德的偉大さにより他國民を救ふことにより存在の價値を證明しなければならぬと希望する人々の運動を有して居る。(シュミットハウゼル)この義務の認識が我國民生活を再生せしめるだらう(ゼネバ部會)

實際上の困難は非常であるが眞直にぶつつからねばならぬ。瑞西は二樣に軍國的と經濟的に碎かれる危險がある。ベルギーの運命と希臘の運命とは明かな警告である。軍隊を棄てる事は出來ない。それは彼が表はして居る理想の必要な保護者であるから。が然しこの軍隊が如何に大きくとも、經濟的壓迫は現在社會組織の必然の結果であるから、之を避けることは出來ない、だから吾等は若し資本家が帝國主義を支へるならば瑞西國は亡びるとの危い結論をなさねばならぬ。といふのは瑞西は聯合國の何れの側とも妥協することは出來ないし又してはならぬ。かくの如き手段をとれば自ら死刑の宣告をなすやうなものである。『その存在は超國民的共存の理想。世界大の社會主義、世界大の個人主義、世界的民本主義の理想の勝利と離るべからざる關係にある。』クロプは大膽に『吾等の利益は何等の權利なりとの題言をもつておる帝國主義者の不道德に對して、我等は、正義は我等の利益なりと云ふ』と云つておる。

瑞西の主なる仕事は何であるか

三つある。社會主義の世界化、個人主義の世界化、民本主義の世界化。

（1）世界的社會主義—この萠生は瑞西の本質的特性なる超國民的結果の中にあらはれて居る。が若しツォーフォングは眩惑されて居ない。彼は明白に自國民の缺點を摘發する。『我等は四海同胞より成る一國民ではない。……我國民は分れ別れになつて居る。……と云ふのは強い人は自分の力と富とを惡用して帝國主義の精神を發揮して居る。（カーヅ●メストラル）この禍は強く防がねばならぬ。どうして？『資本主義と直接に戰つて』と或者は云ふ。（ローザンのアレキサンダー●ジャック。）『相互扶助を組織して』と他のものは云ふ（ローザンのアーネスト●グローア）然し瑞西は他國民の社會的組織、『卽ち總ての國際主義の中で最も忌はしき、經濟的帝國主義の國際的組織に、否應なしに固く縛りつけられて居る。』だから社會的相互扶助の積極的國際化を進捗せしむる爲めに獻身するのは無條件に瑞西の責務である。世界中の反帝國主義者と協定しなければならぬ。『各國一齊に帝國主義者、專制主義者唯物主義に對して戰ふ爲めに國際的團體を設立するやう進捗することが必要である』（シャトネ



ー）

（2）世界的個人主義—吾等は社會主義政治主義に對する均量を必要とする。吾等は人間の生ける力を征服し萎縮せしめるような組織には、たとひ國際主義であれ平和主義であれ、注意せねばならぬ。政治上の理想は個人主義を尊重する眞正の聯邦主義であらねばならぬ。古語に云へる如く『總て本然の道に從はしめよ。！』

（3）世界的民本主義—このことでは學生は滿場一致である。といふのは彼等は民本主義を絕對に信仰して居るから、が彼等は何時もの用心深かさと形式拘泥に對する恐れとを以て、瑞西は眞の民本主義たるには尙ほ前途遼遠であることを容認して居る。『今日民本主義は純然たる形式である。吾々の時代になれば眞の民本主義の原則は或意味に於ては革命的である。』

彼等はその希望を語つてゐる。彼等は外交をデモクラチックに統制することを希望する。民本主義の基礎に立つ平和を希望する。歐羅巴に於ては殆んど全部、政治

上の權力は帝國主義的利己主義を體現せる數人の人の支配の下にある。かこの權力は人民の持つべきものだ、各國民は自分の理想に從ひ、自己の意思の命ずる所に從ひ自分の運命を支配する權利を有する。

尙ほ更に、眩惑さるゝ勿れ、此の時節稀に見る慧眼を以て此等青年は『帝國主義の民主主義化して來たこと』を指示して居る。曰く『西方の民本主義は嚴密に檢査すると資本家と地主階級の統治に外ならない』

露西亞の革命は新しい希望を齎した。『露西亞に於ける二つの民主的革命——一は資本主義帝國主義。他は反帝國主義、社會主義——の間の爭鬪の有樣は民主主義と帝國主義との問題を鮮明する。この有樣は瑞西の民主主義とその行くべき道と使命とを示す。』殊に瑞西をして獨逸製の民主主義の新福音を退けしめよ。この民主主義は政治的經濟的權力の意思に無頓着であつて內政に於ては階級支配に外交に於ては帝國主義に傾く。吾等は新しき位置關係を確定し國民的制限と物質的力の支配に傾ける



惡意ある同時代人とから民主的思想を引き出さねばならぬ。眞の民本主義超國民的民本主義の假面を被れる帝國主義に反對する立場を作らねばならぬ。

## 第六章　新教育

この長き議論は遂に實際的結論に達して居る。公教育を改善し新方面に働かしめねばならぬ。現存の教育制度は三つの不適當な點を有して居る。(一)人道的見地より見てそれは心を遠き時代と過去の文明の研究に押し込め生徒をして現代の責任を果すの準備をなさしめない。(二)特に瑞西の立場より見てはそれは意思疎通を啓發し誘導するを得ないやうな盲目的愛國心を作ることを目的とし、單調に戰爭や凱旋や野獸力の話を繰り返して、自由を教へず、高き瑞西の理想を教へ込まない。今日の人民の道德的、物質的要求を意に介しない。(三)學術的立場より見ればそれは卑しい物質主義軍國主義であつて理想を有しない。今『國民教育』と稱するものの爲めに、『公民學教育』の爲めに運動而かも强大な運動のあるのは事實である。然し

吾等は警戒しなければならぬ。茲に新しき危險がある。彼等は一種の專制的な魂のない偶像國家を作る。彼等は迷信的國家、利己的國家を作る。そして我等の心をその奴隷とする。誘惑にかゝるな！　我等の前には大なる仕事がある。ツォフィング協會は進まねばならぬ。瑞西の道德上智識上の使命遂行の爲めにその分をなさねばならぬ。然し孤立してではない。他國と思想行動を相共にするの情を失つてはならぬ。Gesinnungsfreund（思想の友）に、交戰國の友、佛獨で斃れた若き人々に、今尙ほ生ける人々に深き心からの挨拶を送る。彼等と協同せねばならぬ。世界の自由な青年と協力して働かねばならぬ。ツォーフィングの會頭にして、この議論の議長となり之を纏めたユリウス・シュミットハウゼルがその結末に於て同胞等に訴へて居る。新しき瑞西、―新しき人道、これに對する信仰を有たねばならぬ。これが爲めに働かねばならぬ、これが爲めに新しい道を探さねばならぬと訴へておる。



＊＊

私はこれ等學生の後に隱れるのがよいと思つた。でもし私がこれ等學生の思想に代へて私自身の思想を述べておる所があれば私が屢々云ふ通り私は甘んじて叱責を受けたい。私は彼等自身に語らしめた。この歷史上最も悲慘な時代に於て長時間に亘り熱心に自分の信仰を點檢し、一種のテニスコート＊の誓に對する信仰を嚴肅に確認し、自分の義務を論じたる熱心な眞面目な人々である。一語でも之に註釋を加へるならばこの若き人々の見解の美を減ぜんことを恐れる。吾等は彼等が自由に對する信念、人民の相互扶助に對する信念、その道德使命に對する信念、帝國主義―國の內外を問はず、軍國主義及資本主義の――ヒドラ（多くの頭ありて切れども切れども復た生ずる蛇）を破壞すべき義務に對する信念、より正しき、人道的な社會を建設するの義務に對する信念を確認するのを見た。

※一七八九年六月廿日佛蘭西革命の最初ベルサイユのテニスニトに於ける

私は彼等に友愛の挨拶をする。彼等は孤立して叫んで居るのではない。到る處から反響が相應じて居る。私は到る處に同じような青年があり、瑞西の友に握手せんと手をさし出して居るのを見る。この大戰の興敗—自由な魂を碎かんと努力しながら、却つてこれ等に互に固き協力を求むるの必要を感ぜしむに成功した戰爭—は私をして歐羅巴、亞米利加、東洋、極東一切の國々の青年と密接な關係を結ばしめた。到る處私は同じような希望と苦惱の交、か樣に明かになつておる過去の怨恨と愚昧とを破壞せんとする同じ熱望、同じ反抗的態度、同じ決心を見出す。砲火で焦がされた摩天樓を建てて、戰爭によつて焦された野蠻な國民や强盜や熱狂のこの舊世界てふ打ち震ふ建物を支へておる地盤よりはもつと廣いもつと確乎した新基礎の上に人間社會を再建せんとする同じ野心を以て、皆が勇んでおるのを私は見る。

一九一七年　六月



一九一七年七月　ゼネヴァ（Demain.）

# 十五　砲火の下

アンリ●バービュスによつて

茲に戰爭の慘害を映す鏡がある。その鏡の中に戰爭は十六ヶ月の間日々に映されておる。それは兩眼の鏡である。それは澄みきつて鋭く勇ましい。それは一佛蘭西人の眼である。著者アンリ●バービュスはこの書物を一九一五年十二月『クルイと一九高地に於て余の身邊に斃れた戰友の記念の爲めに』献げておる。巴里に於いて『砲火の下』はゴンクール賞を貰つた。多くの自由な言葉、非常に自由でない言葉さへも一々檢閲されて居た當時その樣な眞實を描いた書物が要部を抹消されずに刊行せられ得たのは何といふ奇蹟だらう。私はその事實を述べようとは思はない。かそれを利用しようと思ふ。この實見者の聲は過去三年の間歐洲の殺戮場を理想化するに役立つた興味中心の虚構事を黑闇の中におし込んでしまう。



***

此の著作は第一流のもので、その中の數章は全文を轉載する必要あるほどである。が私がこゝに取扱はうと思つておるのはその主なる點——その藝術的の手際とその思想である。

その與へる有力な印象は極端な客觀性である。バービュスが社會問題に關する意見を述べておる、最後の章を除いては吾等は何處にも著者自身に接しない。彼は名もなき戰友の間に隱れておる。彼等と共に戰ひ苦しみ一瞬毎に間斷なく隱れて行くやうに思へる。彼は畫面から自分を引き除き自分を掩ふ精神的力を有して居る。彼は動き行く光景を熟視する。傾聽し感じ、觸れる、すべての五官を緊張せしめてそれをつかむ。この佛蘭西の魂が示しておる確かな把住力は驚くべきものである。と云ふのはその見取の鋭利なこと、その手練の正確なこと、何等の感情を交へて居ない。

我等はその活々した、身震ひするやうな、生な複雑な筆致は、あはれな、人間といふ器械が倦怠した蟄居から眩想の神經過敏にうつり行く激感と發作の有様を寫すによく適して居るのを認める。がこの羅列的筆致は常に自制力ある叡智と伴うておる。その文體は印象派である。私の意見では著者はジュール・ルナールの風にならつて洒落を用ゐる傾向がある、あり過ぎる。彼は「技巧的書き方」を好む。これは典型的な巴里産物であつて通常の場合には感情を白粉のやうに塗りつけたように見える。が戰爭の激亂の場合だからヒロイックな雅致を示しておる。叙述は簡潔で陰慘で息苦しい、が時々休息の爲めに挿話があつて、全體の統一を中斷し緊張を暫時ゆるめる。此等の挿話、例へば『賜暇にて』の章中の挿話の美しさ、その感情を賞讃しない讀者はないだらう。が書物の四分の三は『暗き空』の下に砲火と雨の下に—或時は地獄を見、或時は洪水を見—ありしビカーデーの塹壕のことを取扱つておる。軍隊は數年間永遠の戰場の底に、きちんと包み肩々相繋ぎ「空より降る雨、地より流



るゝ泥水、すべてに漲る限りなきものより發する寒氣に對し」押合ひ詰合つて埋つて居た。兵士達は異様な皮を裝ひ毛布を卷き……チョッキを着、幾枚もチョッキを着、四角な防水布、皮帽……防水布や護謨の頭巾……穴居人類か、ゴリラの様に見える。彼等の中の一人は地を堀る際に第四世紀の人類が作つた骨の柄のついた石器の斧を掘り出しそれを使つて居る。他の人々は、野蠻人のやうに、つまらぬ裝飾を作る。三種族が相並んでおる、すべての種族。あらゆる階級ではない。大部分は土百姓や工匠の息子である。小農、農業勞働者、車力、人足、用使ひ、工場の親方、サロンの番頭、新聞賣子、金物屋の小僧、鑛夫。稀に自由職業者が居る。これ等の混合物は『工場や兵營訛や田舍言葉それに新語を加へて』共通な言葉を有して居る。各人を一の畫像としてその鋭利な賞讃すべき似顔を表はして居る。で一度その人々を見ると常にその人々を識別し得る。がその描寫の方法はトルストイと全く異つておる。ロシア人は深い所まで測らなければ魂を知るを得ない。こゝでは吾等はたゞ見て通つて行く。

各個の魂は存在しない。たゞ外殼ばかり。その殼の下に、全體の魂が苦しみ、疲勞におし潰され、喧騒に虐待せられ、煙に毒せられ、無窮の退屈、眠氣に堪へ待ちわびて居る。それは『待つ器械』、もう考へようとしない。理解しようとする考もなく、自暴自棄になつて居る。これ等は兵士ではない。彼等は兵士たることを望まない。彼等は人間である。『彼等は人間である。』生命から無法に引きはなされた、あらゆる種類のよき友である。彼等は無辜である。容易に自制力を失はない。見識が狹い、けれども常識に富んでおる—辜それが時々休止する。彼等は何處でも導かれる處に行き命ぜらるゝことをなす。彼等は不撓で多く堪へ得る。單純な人々が技巧的に一層單純化せられ、周圍の境遇の爲めに原始的本能が强められておる。自己保存の本能、利己主義、生き殘りたいとの頑强な望、飲食眠の欲など、大砲攻撃の危險の中にあつても疲れた二三時間の間に欠伸しトランプをし馬鹿話をし『假寢をする』、要するに彼等は退屈して居る。『此等の絶大な大砲攻は心を疲らせる』彼等は苦しみの地



獄を通りながら、それを一切忘れる。『吾等は全く多く見た、そして吾等が見たものは餘り多すぎた。我等はそれを皆とり入れるように作られて居ない。それは各方面に吾等から逃げて行く。吾等は餘り小さい。我等は忘れる機械である。人は殆んど考へないものである。殊に人は忘れる』。ナポレオンの時代には各兵士は背嚢の中に元帥の司令杖を入れて居り、各兵士は、頭の中にコルシカの小さい士官の像を描いて居た。今や各個人は無い、人間の塊がある、それも大きな力の中に消えて居る、『六千哩以上のフランス塹壕、六千哩以上のかくの如き苦痛と災惡、そしてフランスの戰線は全體の八分の一である。』著者は自らその比喩を原始人民の粗野な神話より或は宇宙の大動亂より借らねばならなかつた。彼は『絶えず血を流し腐れる大地の內臟から引きとられた死人の川』—『無邊の陰氣な三途の川』—『ヨシヤパテの谷』—歴史以前の有樣を書いておる。各個人がどうしてこんなにまで達するのか？　その苦しみは何の意味か？『不平を云ふて何の役に立つか？』と一人の

傷いた兵士がも一人に話しかける。『戰爭はさうしたもの、戰鬪ではない、恐ろしい不自然な倦厭である。腰までの泥水、汚物、悲慘なことの無限の單調、それを時々破る急な悲劇』あちこちに夜の靜寂を破る人の唸、深き身震ひ。

この長い話の間に彼處此處灰色な陰鬱な均一から峰が突出してゐる―『砲火の下』の攻擊「野戰病院」「曉明」など。もし紙面があれば攻擊の命令を待つ人々の有樣を書いた節を引用したいほどである。微動もしない、外面の靜寂の底には、夢想や恐怖や名殘の思がひそんでおる。眩想もなく、熱心もなく、昂奮もなく、當局の忙しきプロパガンダにも拘らず、實質上道德上の熱狂もなく、自分のなして居ることを充分に自覺し『人類の狂愚のお蔭で自分等に課せられた狂人の役割を勤める爲めにも一度』飛込めとの合圖のあるのを待つておる。やがて「眞逆樣に深淵に飛び込み」水の中へほり込んだ燒鐵のようにシュウ〳〵と鳴る砲丸の碎片の中、毒瓦斯の中に疾走する。次に『塹壕の中の虐殺』が始まる。『最初は何をしてよいかわからない』がす



ぐ狂熱に捕へられ『自分が一番よく知つておる人さへも見別け難くなり今までの生活は急に遠い〳〵昔に退いていつたように思はれる』……かくて狂亂は過ぎ、後に殘るはたゞ限りなき疲勞と何時來るかも知れない待望とのみ。

＊＊＊

私は此のようなことはもう切り上げて、この書物の主なる內容―その思想を―見なければならぬ。

「戰爭と平和」の中には人類を導いておる運命の深き意義が熱心に探求せられて居る。そして時々苦痛又は天才の閃光によつて見出され、種族的又は個人的の感受性によつて特別の透察力を有しておる少數の人々、例へばアンドレフ公爵、ピーター・ベスホンゾーによつて見出されて居る。が一つの大きな轆が今日の人々の上を轉がつていつて、一樣のレベルに押し下げたように見える。最も多く起り得るのは暫くの間折

々大きな群の間から將に死なんとする獸の孤獨な鳴き聲の起つてくることである。
このやうにして我等は伍長ベルトランドの俗世界を離れた像を得たのだ。『思慮深い微笑をして』—並びなきスケッチ—『自分自身については全く語らず、言葉の少い人、殺戮に續いて來る黄昏の時、やがて自分自身も殺されようとした時、只一度自分の懊惱せる想ひの秘密を打ちあけることのできた人を、彼は接戰の心亂れておる際に自分が殺した人のことを考へる—

『それは爲さねばならぬ。將來の爲めになさねばならぬ』と彼は云つた。

彼は腕組みして頭を振つた。

『將來！』彼は突然叫んだ。『吾等の後に生きる人々—その人々はこの殺戮を—この虐使をブルータークやコルネイユなどの英雄の行又はアバッシ（佛蘭西巴里の無賴漢で黨を結んで市中を横行する）の行と比較して何と思ふであらう。之をなす吾等自身それを知らない。……それでも戰の上に起き上つた一人の人のあることを記憶せよ、彼はその勇氣の美と偉大と



を以て照すであらう』

バービュスは書く、私は彼の上に身を屈め杖によつかゝつて聽いた。私は薄暮の靜寂の中に、折々靜寂を破つて唇から出て來る言葉に醉はされた。彼の聲は鳴る—

『リーブクネヒト！』

同じ晩に、犬を思ひ出させるやうに顔に剛毛の生へた卑しい豫備義勇兵、マーセローは一人の戰友が『ウキルヘルムはいやな野獸だ、ナポレオンは偉人だ』と云ふのを聞いて居た。この同じ兵士が戰爭を批難した後で、自分の五歳になる子供が好戰的熱情をあらはすことを喜んで話して居た。マーセローは物憂げに頭をふつて、途方に暮れ考へ込んだ犬のやうな美しい眼附をして嘆息して云ふ『オ、我等の中の誰もこれほど惡くはない、が吾等は皆不幸だ、哀れな奴だ、でも吾等は餘り間抜だ』

然し一般にかくの如き身分の低い人々の叫聲は無名である。殆んど誰が語つておつたのか知れない。それは大概皆が共通な思想を有しておるからである。此の思想

は共通な試練から生れて居るので、彼等を味方の後方に居る世界の人々よりは、敵の塹壕の中に居る不幸な人々と親密ならしめる。後方から出て來る訪問者、所謂『塹壕漫遊者』に對し、後に居る人々、一般の不幸を開拓した新聞記者、好戰の有識者に對して、兵士は一緒になつて侮辱をする、それには亂暴はしないが國境がない。彼等に『大なる事實の默示』があらはれた。—人間の間の差異、人種の別よりももつと深くもつと越へ難き國境を有する差異、各國民の間に於て儲ける人々と苦しむ人々—一切のものを犧牲とするやう强ひられた人々、その多勢、その力、その殉難を極端まで出してしまつた人々、上首尾で笑ひながら進む他の人々に踏まれる人々—との間の鋭い、目立つた恒久の差別が明になつた。

この默示を受けた人は苦々しげに云ふ『このやうな事柄は人をして死を辭せざるやうに鼓舞することはできない！』

然しこの人は勇敢に而も柔和に、他の人々のやうに死んでいつた。



***

この書物の頂點は最後の章『黎明』である。それは丁度結文のやうである。結文の中の思想は序言、『幻想』の思想と相照應し、更にそれを擴大しておる、恰も交響樂に於て初まりの約束が終りに果されると同じである。

『幻想』は宣戰の初まりを書き、モン●ブランに面するサヴォイの療養所にその潮のおしよせて來た有樣を書いてゐる。そこの病人達は、世界の隅々からこゝに引き出され『この世の仕事から生命そのものからさへ—離れ……殆んど、未來の世の人であるかのやうに仲間の人間と疎隔し、遠くの方、今生きておる人、狂人の理解し得ない土地を見ておる。』彼等は脚下の洪水を熟視しておる。彼等は難船した國民が藁を攫んでおるのを見る。この三百萬の奴隷は罪と過とによつて互に相打ち、戰爭と泥濘の中に飛び込んだ。そしてその顏をあげておるがその表情は遂に發生し始めた

意思をあらはしてゐる。未來はこれ等の奴隷の手中にあるそして舊世界は、他日その數とその不幸との無限である人々の間に結ばれる同盟によつて變形せらるゝことは明かである。

結末の章『黎明』は雨の爲めに氾濫せる低地の『洪水』の繪である。崩れた塹壕の繪である。その有樣は創世紀の光景に似てゐる。獨逸人と佛蘭西人とは共に天罰を逃げ、無茶苦茶に一緒の墓に陷つてゐる。これ等の難船者のある者は水面に出てゐる泥の畔に遁れ、忍從より覺醒し始める。そして、その苦しめる人々の間に昔の希臘謠の三個の左方舞歌章と右方舞歌章のやうな、著しい會話が續いて起る。彼等は過度の苦しみで壓し倒されてゐる。尙ほ彼等は『恰も更に甚しい不幸によつての如く』來らん日に殘存者がこの害惡を忘れるだらうと考へて、一層壓し潰されてゐる。

『どうかして人々が記憶して居て呉れたならば！　もしどうかして記憶して居て呉



れたならば、又と戰爭は起らないだらう』

急に四方から叫聲が起る『もう戰爭があつてはならぬ。』

皆が順繰りに戰爭を罵る。

『兩軍が相戰ふのは—丁度一つの大軍が自殺すると同じだ』

一人が云ふ『君が勝てば宜しい』

外の者が云ふ『それもよくない。勝つても何も落着しはしない—我等のなすべきは戰爭を殺すことだ』

『では我等は戰後戰ひ續けねばならぬのか？』

『多分さうだらう』

『然し多分我等が戰ふのは外國人とではないだらう』

『さうだらう。人民は今日その主人から逃げようと戰つてゐる。』

『では人はプロシヤの爲めにも亦働くか？』

『さうだ、我等はそれを望む……』
『然し吾等は他國民の仕事に干渉してはならない。』
『否、否、吾々はしなければならぬ。君が他國民の仕事といつておるのは自分自身の仕事だ。』

## 其筋の注意により抹消



これ等は今諸國と不幸を共にして居る獨逸の兵士等と同じ敵である。獨逸の兵士等はいまはしくも裏切られ、虐待せられた哀れな阿房であり、飼ひ馴らされた野獸である。……然しも一つは何處に生るゝとも、どんな風に名を語らうとも、どんな言葉であざむかうとも、それ等に拘らず汝の敵である。彼等を上、天に於ても、下、地に於てもよく見よ、到る處で見よ！　彼等の顏を決して忘れないやうに覺えるまで見よ！』

これがその軍隊の泣哭である。がこの書物は希望の一筆、國際的同胞の口外せざる誓言、を以て結んでおる。黑天の雲に罅目が出來、靜かな光線が氾濫せる平和に降つて來る。

＊＊＊

太陽の光線一本よく一天を明かならしめることは出來ない、又一人の兵士の聲は

決して全軍の聲ではない。今日の軍隊は國民である。そしてかくの如き軍隊には、各國民の中と同じく多くの異つた潮流が相交錯して居る。バービュスの話は殆んど全く百姓と勞働者とより成る一小隊の話である。がこれ等の身分の低い人々の間に、一七八九年の第三階級のやうな人々の間には何物もなく亦一切のものがあることの事實—この軍隊のプロレタリアートの中に世界的人類の自覺がぼんやりと形作られておること=かくの如き大膽な聲がフランスから揚げられ得ること—實際戰つている人々は周圍の不幸、差し迫れる死を無視し交戰國民の友愛的結合を夢想するやう努力することが出來ること—こういふ事實の中に私はすべての戰勝にまさる偉大なものを見出す。私は戰爭の光彩にまさる鋭い光彩あるものを見出す。私は戰爭に止めを刺すある物を見出さんことを望む。

一九一七年二月

一九一七年三月十九日 Journal de Geneve



## 十六 AVE, CAESAR, MORITURI TE SALUTANT. (皇帝萬歳 死に行く者共君を祝し奉る)

安全な場所に居る勇敢な觀客に献ぐ

アンリ●バービュスが『クルーイと一一九高地に於て余の身邊に斃れた戰友の記念の爲めに』献げ、ピカーヂーの塹壕内の經驗を書いた、恐ろしい、立派な書物の中の一場に、二人の兵卒が賜暇に隣の町へ行つたことを描いておる。彼等は泥と血の地獄を遁れた。數ケ月の間彼等は名狀すべからざる身心の苦惱になやんだ。が今は、戰線から遠く離れた安全な所に居ながら、戰爭の熱ではり裂けようとしておる愉快なブルジョアの中に居る。これ等の長袖武士はこの二人を恰も結婚式から歸つて來たかのやうに歡迎する。戰線はどんな具合か一言も尋ねない。却つて兵卒の方がそれについて聞かされる。『突擊は花々しいものに相違ない！　軍勢が酒宴へ行くやうに喜び進む、何も引き止めるものはない。笑ひながら死ぬる！』こう云はれると吾

が兵卒は默つておるより外は何も出來ない。一人は諦めて友に云ふ『この人達は戰爭について君よりもよく知つておる、戰線の模樣をすつかり知つておる。君が君の僅かの眞理を齎して歸ることがあつても彼等が饒舌の仲間の中では、まるで場所外れだ』

私は戰爭が終つて兵卒が皆故鄕に歸つた時彼等がそう容易にこの後方に居た自慢家達に、その地位をゆづらうとは信じない。既に實際戰に從事した人々は獨特の痛ましいそして恨み多い調子で語り初めておる。バービュスの書物がこの事實の有力な證據である。

その他にも多く知られてないけれど同じ位人心を動かす戰爭の記事がある。私の引用するものは皆公刊せられておるものである。私は戰爭の繼續しておる間は個人的の秘密は口頭のでも書いたのでも用ゐないことに定めておる。私が既知の又は未知の友達から聞いた事柄は神聖な預り物である。で特別の許しがあるか、又は四圍



の事情が安全になるに非れば用ゐない。私がこゝに紹介する記事は、二三の新聞しか獨立することが出來なくなつた程の嚴密な檢閲の行はれておる際に巴里でその檢閲をうけて出版されたものである。これによつてもこれが周ねく知られて隱すことの出來ないやうな事實であることがわかる。

私は著者をして語らしめる。註釋は餘計なことだ。語調は充分明瞭である。

＊＊＊

バウル・フッソンの全燔祭、（一九一七年一月十日巴里ッールノン街一九エフ・ラクロア發行詩文集『詩と散文』）—この書はイル・ヅ・フランス出の一兵卒手記である

その著者は熱心もなく、戰爭も嫌ひながら、好戰の熱もなくて戰線に立つた『が兵卒としては他の兵卒のする丈のことはした。』

十九頁。『何たる高き道德律の名に於てこれ等の戰爭が吾等に課せられたか。これ

は民族の勝利の爲めであるか？　アレキサンダーやシーザーの兵卒の業は何が殘つておるか？　人は戰爭に對して信仰をもたねばならぬ。自分は神の爲めに、大なる正義の爲めに戰つておることを信仰せねばならぬ。然らざれば戰爭をそれ自身の爲めに、愛せねばならぬ。が吾等は信仰がない。吾等は戰爭を愛しない。それについて何も知らない。人は神をも大なる正義をも信仰せずして戰ひ死する。人々は戰爭を愛しない。それでも敵の方に顏をむけて死する。多くの人は覺めないで、考へなしに死んでゆく。が他の人々は心の中で苦しんで、無駄な犧牲が人間の狂愚の現實を見て苦しんで死ぬる。』

二十頁。塹壕の中にて。『皆戰爭を呪つて居た。皆それを嫌ふ。或者が云ふ『佛蘭西人といひ獨逸人といふが皆一樣に人間だ。吾々と同じく心身に於て苦しむ。又彼等は故郷に歸ることを夢みて居ないか？　一つの村を過つて二本の指を失つて軍粉に服することの出來なくなつた一人の人を見た時兵卒共はその人に云つた『幸せな



奴だ！　戰爭に行かなくてもよい！』

二十一頁。『私は美、善、正義の來ることを信ずるのではない。—又私は默つて禮拜せねばならぬ陰の力の象徵なる、過去の偶像を鍍金し直さうとする人々の一人ではない。私は服從者でもなく信仰者でもない。—私は憐愍を好む—私達は不幸な者である。そしてたとひ吾々が刑吏であり、虐殺者であつても、それは吾等を慰めて呉れるから。吾等が受けて居る害惡に對して慰めは要らなくとも、吾等がなし又はなさんとする害惡に對しては慰めが要る。吾等は他人を、殺し殺されるやうに苦しめたが故に慰めを必要とする』

二十二頁。『砲彈頭上に轟く時私は前屈みして考へる。死！　なぜ私等は此の戰場で死なねばならぬか？　文明の爲めに、國民の自由の爲めに死ぬるか？　言葉だ、言葉だ！　言葉だ。吾等は人間が互に相食む野獸であるが故に死んでおる。吾等は幾梱かの商品の爲めに死んでおる。我等は錢の爭の爲めに死んでおる。—藝術、文

明、文化はローマのでもチユートンのでもスラブのでも一樣に美しい。我等その皆を愛せねばならぬ。』

五十九頁。『吾等はボードレールと共に戰士の武器を嫌ふ。戰爭前吾等が生きて居た時代は大なる時代であつた。軍旗の搖ぎ、軍隊の長い列、砲の轟、喇叭の音、こんなものは吾等をして集合的殺人、人民の奴隷化を讃美せしむるやう動かすことは出來ない……若き人々は今日汝の墓場の上に伏し、汝の墓標に花を撒き、汝の不死を求めておる。汝にとつて何たる空しき言葉ぞ。彼等は汝が過ぎ去りしよりもつと速く過ぎ去るだらう。何としても汝は數年を出でずして死ぬことは確かである。然しその數年の生命が汝の宇宙であり汝の力であるだらう。』

＊＊

アンドレ・デルマーの『待望。』（巴里、ロッシュシュウァー並木街六八、アンドレー・デルマーとマーセル・ミレーの發行する評論雜誌「Vivre」の第四冊一九一七年三月發行のものの主要な文）

若しヤスヤナ・ポリヤナの家長に、已に長い、悲しみにみちた生涯に加へて、もう數年の生命がかされたなれば、彼は善き人々のこの悲劇に戰慄したであらう。トルストイは限りなき憐憫の人であつた、で彼の心は、突然この大戰爭に投げこまれ、生命に對する愛着を公言し、未來に對する信仰を確實な護符と見、熱心に生命の肯定の大叫聲を發した人々の運命を考へた時には、苦しみで胸が裂けたであらう。

『吾等の青年時代を生き存らへる』—何と鋭い皮肉な言葉ぞ！　何たる豫想を彼等が突然喚起するか！　一夜銃を荷へとの命令下つた爲めに、吾等は一切の幸福を得ることが出來なくなつた。悅びを奪はれた！　人々は二十歳の時に既に耶蘇の受難に比べらるべき苦を經驗したことについて書くであらう。然し吾等は日々死ぬる。吾等の特權は屈辱である—吾等は大騷亂の間を生きて來た、吾等は過去の過の償金

將來の靜謐の保證であつた。この使命は立派であると同時に殘酷である。それは鼓舞すると同時に惡感を抱かせる。吾等が經驗しておる痙攣は吾等を傷け吾等を殺すから！　今日熔鑛爐から掻き集められた哀れな震へる金滓は月桂冠の悲哀を知つておる。吾等のもつておる自尊心は吾等をして虛妄の、そして一時的の光榮を受け入れしめない。吾等は樣子振ることの誤を知つておる。又ある夢想の空しいことも吟味した。火は舞臺面を舐め盡し表面の華美を灰燼に歸した。吾等は今吾等自身と。もつと充分に目覺めもつと眞面目に、もつと迷より覺めて、相面しておる。吾等には癒すべき密かな傷があり蔭で鎭めるべき大きな惱がある。時代の經過は口中の痛みのやうである。……この經過は如何に苦しくあるだらう。そしてその棄兒は如何に數多くあるだらう。已に新しい快惱が吾等の心を壓する。今尙ほ戰つておる人々が歸り來る日に苦しめるものはこれである。戰場を充たしておる敗殘の人や、死人を見るときその快惱は恐ろしくひどくなる！。それはどんなにか若き人々の意思を痙



攣せしめその魂の勇氣を消すであらう！　困難な混亂した時代！　人は强いてもつと容易き道ともつと殘酷でない偶像を求めておる！……

『吾が時代の青年！』これ等の文章を書く時私が考へておるのは諸君である。私は諸君を知らない、が今尙ほ戰ひつゝあり、或は負傷して塹壕から歸つて來たことを知つておる。諸君のことを考へておる私が諸君に街で遭つた時諸君は恥かしいやうな身態をして一生懸命自分の弱々しさを隱さうとして居た。が諸君の眼には內心の怒の漲つておるのを見た。私は諸君の經驗した恐ろしき時を知つておる……私は諸君の疑惑を知つておる。私は諸君の不安をも共にする。私は諸君が『次は何？』といふ疑問で如何に惱まされて居るかを知つておる。又諸君は高い處から何が見えるか、何が起らんとしておるかを尋かんとして居る。私は諸君の『次は何？』を了解する——『生きる！』諸君はこれを皆の人の心に達するよう眞直に歌ふ。『生きる！』諸君は吾が殘酷な時代のこの叫を體現しておる。私はこの簡單にして恐ろしき叫聲

が勝ちほこれる死の足音の近づくのを氣づいておる傷者の唇から出て居るのを聞いた。私はそれが塹壕で祈禱のやうに低音につぶやかれておるのを聞いた。――若い人、これは悲しき時である。汝は恐ろしい戰爭の殘存者である、汝の活力は肯定しなければならぬ。汝は生きねばならぬ。一切の虚僞を脱ぎ、一切の蜃氣樓を破り裸のまゝで自分一人を見ねばならぬ。汝の前に大きな白い道が開けておる。進め！遠くより招く。舊世界と昨日の偶像を見捨てよ。過去の役立たない聲に耳を傾くることなく進め！

＊＊

相互の殺戮をなした世界の各國に於て犧牲とせられた善き人々、及同胞達の名に於て、私はこれ等の苦痛の叫聲を犧牲を出したる人々の面前に投げかける。血が彼等の顔を刺さんことを！

一九一七年五月セネヴア（Revue mensuelle.）



## 十七　皇帝萬歳……

### 生きんとする者共君を祝し奉る

前の文章中に私は佛蘭西の兵卒達の書物を引用した。アンリ・バービュスの『砲火の下』やパウル・フッソンの『全燔祭』及びアンドレ・デルマーの鋭い默想録はその惻々たる、深い人間的な叫聲を吐露したものである。戰線より遙か離れた後方で製造した不面目な戰爭の理想化―奇怪な虚僞の粗雜なエピナールの像―の代りに、彼等は吾等に眞理の嚴肅な顔を見せて呉れる。彼等は若き人々が罪ある父老の狂暴に從ひ互に相殺戮せるその殉難を示して呉れる。

私は今日此等の聲の他のものを紹介したい。フッソンのストイック的苦難、デルマーの絶望的やさしさよりもつと苦しい、もつと男性的な、もつと執念深いのを紹介したい、それは『小學校教師の文學批評雜誌、Les Humbles』の主筆で私の友人モ

ーリス・ウレンのものである。

彼は重傷して次の感狀と十字勳章を貰つておる。—

『歩兵第七十三聯隊第八中隊一等卒ウレン（モーリス）は善良なる兵卒にして、恐るゝことなく、自己の委せられたる地點を防禦する爲め敵の優勢に對抗し重傷を負へり。』

一九一七年八月の Demain 誌にこの人が傷き獨逸の兵卒によつて兄弟の如き親切な助を受けたとの驚くべき實戰記が載つておる。彼が打ち殺されることを餘期して喘ぎながら横はつて居た時一人の青年が笑ひながら彼の上にうつむき手を差し出て獨逸語で『友よ！　どうですか？』といつた。そしてこの負傷兵がその敵の眞意を疑つて居た時、敵は『オヽ、宜しい、友よ！　吾等はよき友とならう！　さうだ〈よき友よ。』と續けて云つた。この話は、

『私の兄弟、一九一四年十二月三十日グリニーリー・ウードに於て私を殺さんとしたその手を控へ、寛大に私の生命を救つてくれた、名を知らないウキテンベルヒの一兵卒に』

『ダルムスタットの病院にて父の如くに私を看護して呉れた(敵の)友に』

『そして私に人間と人間との關係で話しをした戰友、イー、ケー、及ビーに』

献げて居る。



＊＊＊

此の恐るゝ所なき、又批難せらるゝ點なき兵卒は佛蘭西に歸つて來て後方に三文文士の大言壯語軍の居るのを見た。彼等の害毒、愚昧は彼を激昂せしめた。彼の多くの友は侮蔑的沈默を守つて引きこもつて居たけれども、彼は自分が今まで爲して來た通　に爲し『優れた力』に對し勇ましく攻擊を始めた。一九一六年五月彼は『Humblea と稱する小雜誌の主筆となつた。この雜誌がその言葉の手荒く、默つて居

ずに自分の聲を發することは幾分その名と名實相反して居るやうである。彼は大膽に宣言する—

『戰爭の旋風の中から出て來たが、まだその渦卷の中に悶えておる、吾々は周圍の凡庸者流に身を任せ官製の思論を奴隷のやうに鸚鵡返しすることを以て滿足しない……吾等は官製の食物で日々組織的に人民の頭を充たすことはいやになつた。……吾等は自分の權利も、希望をも放棄しない。』（一九一七年五月發行。別れの言葉）

毎號の雜誌は彼の獨立の生々した證據であつた。此の頃、若い思想家の發行する雜誌が到る處廢墟から生れ出て來た、中にもウーレンのはその人格の力と不屈の公明によつて牛耳を執つて居た。

彼はハン・ライナーを大切な友として居た。この人は歐羅巴野蠻人の中にあり、この今の渾沌の中にあつて、追放せられたソクラテスのやうな平靜を持して居た。も一人の賢人、版畫家ガブリエル・ベロットは精神上の平和には惡意といふものが全



なくサン・ルイ島に住み、恰もセーヌ河の兩腕で世界の苦難の來らぬよう保護せられて居るかのやうであるが、その光輝ある意匠の平和で以て最も陰氣な文章を照しておる。[1] 他の友、若き人々、ウレンのやうな兵卒が彼の眞理の爲めの戰を援けんと集つておる。その中には例へば、詩人にして批評家なるマーセル・レバービエーも居る。

1 澤山の中で私は私の文章『虐殺せられた人々に』を擧げたい。私は本書第三章に載せておいたが檢閱官はその文章中百行を削つてしまつた。その空所へベロットの美しい版畫を挿入した（一九一七年五月號）

Les Humbles の最近號には立派な文章が載つておる。ウレンは先づ過去三年間自由なる魂をもつ人道主義者として立つて居た僅かの佛蘭西操觚者に讃辭を呈しておる。それは次の人々である。アンリ・ギルボーとその雜誌、Demain Vous etes des hommes と Poéme contre le grand crime の著者・ビー・ジー・ジューヴ。—この人の同情深い魂は人類の一切の苦痛一切の憤怒の風に樹のやうに震ひ動く。マルセル・マ

ルチネー戰爭（戰爭の恐怖）が作り出した最大叙情詩人の一人であつて、自由なる魂の苦と反逆とを永久に證明する詩 Tempo mendico の筆者である。かの人心を感動せしめた操觚者デレマー。及び二三の新刊の雜誌。Les Humbles の主筆は進んで旨目的國威論者に對し自分の考ふる所を語り、彼が名づけて『僞ものの文藝の前驅』と稱するものの根據を明にして居る。此の著作をする兵卒、無遠慮な男は事柄を丁寧に述べるやうなことをしない—

『余は汝等が讃美して居るこの戰爭から歸つて來てこの文章を書いておる、余……余は感狀を貰つた。又十字勳章をもらつた。が佩用しない。余は七ケ月の間戰爭といふ獄舍に繫がれて居たが負傷の爲め無能となつて歸つて來た。余は戰爭の逸話を以て汝を溺らせることも出來る。がそのやうなことはしやうと思はない。が戰爭に關する書物は書いておる。余がこの書物の中に盛る所は余の心の感じた事。一個の人間がこの數ケ月の間名狀すべからざる慘狀に苦しんだ顚末及び稀有な閃光によつ



てライン河の兩岸、全世界に尙ほ人類が生き殘り、親切が尙ほ存することを認め得た時に經驗した悅とである。汝、エム、ビーは『戰爭に於て吾祖國の爲めに死するは美しく且つ快である！』と歌ふ。がこの死に面した人々は汝に語るであらう。死なねばならなかつたかも知れなかつた時に、死は決して美でも快でもなかつた、と—汝は崇高なぼろ〳〵になつた三色の國旗を稱讃する。—靑は我が勞働者の上衣であり、白は慈善事業に從事する立派な尼達の白い頭巾である……と汝は私が汝の赤の說明を待たないでやめてしまつたことを宥して呉れるであらう。私には私の一人の記憶丈でもう充分だから。—一九一四年十二月のあの恐ろしい朝アルゴンヌの凍つた土の上に流れては凝結する私の傷の赤い血、毒惡な屠殺場の赤い泥、死んだ戰友の粉碎された頭、過酸化液で潤うた傷口、—生きながら腐敗しておる樣な血の混じた泡で半分隱されておる。この恐ろしい、悲しい日到る處見られる赤い像。汝の心の中をさはがしきもの嫌やなものが引續き追かけて通る。詩人のやうに余も云ひた

い。『もう僅かで私の心臓は破裂しさうだと』

彼はその罵倒の終りに他の兵卒著述家ジー・チユーリオーフランシを引用してゐる。これは同じやうな戰鬪的の文體ではあるが、もつと言語も美しからず何等隱蔽する所もなく、これ等の机上の勇者をしてその自慢を呑み下さしめる。(G. Thuriot-Franchi. Les Marshes de France.)

『ずつと若い人々やずつと老いた人々、ピジマを着た詩人達は屹度上靴を穿いた參謀を羨しく思つて無闇矢鱈に愛國の歌を歌ふのを義務と心得てゐる。修辭的な喇叭の音。罵詈が議論の唯一の方法となつた。赤十字の被護の下にある一千の靑踏者流は一つお饒舌が出ると、勇ましい感情、悍き衝動の行列を初める。そこから小謠、唄など過多に出來て來る。その中には、普通の批評家の通り言葉で云へば、『最も秀でた感受性が滿足して純粹の愛國心と結びついてゐる』—どうぞ後生だから吾等にかまわないでおいて呉れ、汝等は何も知らない、默れ……』



かくの如く戰線から歸つて來た一兵卒は後方に居る僞の戰士に對し横柄に沈默を守れと强いてゐる。もし彼等が『兵卒』文體を好むならばそれはこゝに澤山ある。今まで目のあたり死を見て居た人々は確かに此等死—他人の死—の好事家に自明の眞理を話すべき權利を得てゐる。

一九一七年　セネヴァ (Revue Mensuelle.)

# 十八　戰中の人々　Menschen im Krieg.

## （悲哀の人）

藝術は血を以て汚された。佛蘭西の血、獨逸の血、それは常に『悲哀の人』である。昨日吾々はバービュスの『砲火の下』が吐き出す嚴かな悽慘な哀哭を聞いた。今日は『戰中の人々』（Menschen im krieg.）の更に悽慘な哀調が聞える。その聲は敵の陣地から來るけれども、吾が佛蘭西とナバラの戰を好む讀者も、耳を掩ふてその聲をさけるだらうと私は斷言する。實にその語調はその人々の感覺に激動を與へるだらうから。

『砲火の下』はこれ等の長袖武士には幾分辛抱ができる。バービュスの書物は徹頭徹尾外見のよい非人格のものである。彼の舞臺には多くの人が出、人物の鋭い輪廓が描き出されるが、一人として主役を演ずるものがない。そのローマンスの主人役が



ない。結局讀者は各頁に物語つてゐる困苦と相親しみを感じない。そしてこの困苦はその原因と同じく本質的の性質を有してゐる。押し潰す運命の無邊際なることは押し潰される人々の苦悶を少くする。この戰爭畫は世界大洪水の有樣に似てゐる。人間の群衆は天罰を呪ふ。がそれを止むなく受ける。『砲火の下』は將來に對する脅威を唸るけれども、現在の脅嚇を有して居ない。決濟日は平和約條の調印後に延期してある。

『戰中の人々』に於ては裁判が開かれてゐる。人類は證據人席に坐つて屠殺者に不利な供述をして居る。人類？　そうでない、二三の人である、二三の偶然な犧牲者である。その人々は一個人であるので、その苦痛は群集の場合よりも強く吾々に訴へる。吾々はこの苦痛が苦しめた身體惱ました心の中になした慘害を辿る。吾々はこの苦痛と結び付く。そしてそれが吾々自身の苦痛となつて來る。そして又證人も客觀性をあらはさうと努めない。彼は今赦されて喘ぎながら拷問臺から出て來て報

復を叫んでおる激情せる辯難者である。この書物の著者は新しく地獄から出て來て今檢査を受けて居る。彼は息せき切つておる。彼の幻が彼を追ふ。苦痛の爪牙がその跡を彼の顏面に殘して居る。アンドレア・ラッコーは將來一九一四年、恥辱の年の間に於ける人間の情の眞相を書き殘した證人の間に於て第一位を占めるだらう。

アンドレア・ラッストは墺太利の士官である。一九一五―一六年の戰爭に伊太利の戰線で働いた。

＊＊＊

この書物は六つの別々の話の形で書かれておるが唯共通な苦痛と反抗の感情が全體を貫いておる。六つの戰爭の話を列べたについて別に理屈立つた目論見があるわけではない。最初が『出陣』で最後が『歸還』である。その間に負傷兵を描いた『砲火の洗禮』があり『英雄の死』がある。眞中の章は大將軍、饗宴の主、責任ある頭主なる『勝利者』に献呈して居る。最後の三章には身體の苦痛が丁度斬られたメッ



サのやうな恐ろしい顏を出しておる。初めの二章は心の苦痛を描いておる。眞中の章の主人公は精神的の苦痛も肉體的の苦痛も知らない。彼の榮は兩者の上に坐しておる。彼は生命を善しと見、戰爭をも更によしと見る。最初の頁から最後の頁まで反逆が囁いておる。が最後の頁では叛逆は遂に嵩じて殺人となつておる。戰線から歸つて來た一兵士は戰爭成金を殺す。

私は六つの話を解剖する。

『出陣』の場面は戰線を離るゝこと三十哩の所にある墺太利の靜かな小さい町の野戰病院の庭である。秋の黃昏すぎである。歸營の太鼓が鳴つた。あたりは全く靜かである。遠くの方から大きな犬が地底で吠えるやうな大砲の轟が聞えて來る。四五人の負傷せる青年士官は夕の平和を樂んでおる。三人は二人の婦人と浮かれ話をしておる。第四番目の男は國民軍の中尉で、有名な作曲家であるが少し離れて陰氣さうに坐つておる。彼は非常に强い神經の激動をうけて全く疲れ果て、美しい若い妻が

來たけれども快復しなかつたほどである。妻が彼に話しかけても彼は動かない。妻が彼に觸らうとすると彼は怒つて引きさがる。彼女は惱むけれども彼の憎惡がわからない。他の婦人が會話の手初をする。この女は市長夫人で始終この病院で日を暮し、そこで『奇態な、おしやべりの冷血』の名を得ておる。この女は恐怖で滿腹しておる。その無限の好奇心は無情とヒステリー的殘酷の印象をあたへる。こゝの人達は戰爭中に何が『最もよい事』であるかを論じておる。その中の一人によると今晩のやうに婦人と一緒に居ることが一番よい事である。

『……五ヶ月の間男の外何も見ずに居て、まるで突然親愛なる婦人の澄んだ聲を聞く！　これが何よりも一番よい事だ。これあればこそ戰爭にも行く値がある。』

他の一人が答へる。一番よいことは入浴し綺麗な繃帶をし、薩張した白い寢床に入り、二三週間の賜暇が下ることを知ることである。

第三番目が云ふ。—



『何より一番よい事は、俺は思ふ、靜かなことである。—銃聲が一發〳〵五度も反響するやうな連山の中で横はつて居る時急に全く靜かになる、ヒューと鳴く聲も聞えず、咆える聲も聞えず、轟々たる音もしない—非常な靜寂の外何もない。殆んど音樂でも聞くことが出來る。初め二夜三夜私は終中坐つて人が遠くから響いて來る音を聞かうとする時のように耳を欹てゝ靜寂を聞いた。俺は涙を一二滴落したと思ふ。—無い音に聞耳を立てるのはほんとに喜ばしかつた。』

三人の青年はこの最後に話した人を溫かに揶揄して皆一緒に笑つた。皆は眠つておる町と秋の庭の平和に醉はされた。皆は自分の時を出來る丈よく利用し、何物をも失ふまいとし、『一切の事を、暗い室に入る子供がするように堅く兩眼を閉ぢて、容易に受けとりたいと思つた。』

そこへ市長夫人が割り込んで來て息せはしく話し出す。『……があちらで皆さんが遭つた一番恐ろしいことは何ですかお話して下さい』

皆口を窄めた、この題目は彼等のプログラムの中には加はつて居なかつた。急に甲走つた聲が暗がりから出て來た。

『恐ろしい？　唯一の恐ろしいことは出陣である。汝は出陣する―彼等が汝を出陣せしめる。それは恐ろしいことだ』

氷のやうに靜寂になる。市長夫人はその續きを聞くことを避ける爲めに逐電する、彼女は町へ歸らねばならない、そして今最終電車が出る所だからとの口實の下に不幸な小さい妻君をつれていつた。この妻君には夫の言葉が眞綿に包んだ譴責のやうに思はれた。士官達ばかりそこに殘る。そしてその中の一人が病人の心の中の思想の流を轉換しやうと思つて、その妻の來たことについて親しげに世辭を云つた。病人は急に立ち上つて怒つて云ふ『粹な女房？　うん、さうだ、うんとおめかししてる！……俺が汽車で發つ時、涙一滴流しもしなかつた、ウー、あいつ等は皆俺等が出陣する時おめかししして居た。哀れなヂルの女房も亦おめかししして居た。ほんと



に剛氣だ。彼女は汽車の中の彼に薔薇を投げかけた。そしてたつた二ヶ月間彼の妻だつたのだ。……薔薇！　彼、彼！『ぢき又お目にかゝりませう！』彼等は皆それほど愛國的だつた！……』

彼はヂルに起つた事柄を詳記しておる。哀れなヂルが新しく妻から送つて來た寫眞を友に見せて居た時破裂した砲丸が長靴をはね飛ばしそれが彼の頭に中つた。その長靴の中には數碼距つた處で粉微塵に擊ち壞された騎兵の足があつた。長靴には大きな拍車がついて居て、それがヂルの腦の中へは入つた。四人掛りでやつと靴を引き拔いた所が『丁度茶色の水母のやうな』腦味噌が拍車にくつついて出て來た。士官の中の一人にこの話を聞いて恐ろしくなり醫者の許へ走つていつた。醫者はやつて來て病人を獎めて屋内に入らしめようとする。

『もうお眠みにお出でなければなりません中尉殿……』

『無論、行かねばならぬ』中尉は深い歎息をして特に言葉に力を入れて云つた。『吾

々は皆行かねばならぬ。行かない人間は臆病者だ。臆病者には用がない。これがその譯だ。解らないか？　今勇士が流行して居る。おしやれのヂル夫人は自分の新らしい帽子の相手になる勇士を求めておる。ハア、ハア！　これが哀れなヂルが腦味噌を出さねばならなかつた理由だ！　俺は行かねばならぬ、汝も行かねばならぬ。俺達は皆死に、行かねばならぬ。……女は元氣よく見ておる、今はそれが流行だらう……』

彼は何か尋ねる風をして周圍を見まはした。

『これが悲しくないか』と彼は穏かに尋く。すると又怒つて叫び出した。

『彼等は俺等を誑かして居はしなかつたか？……俺は暗殺者であつたか？　俺は弱者いぢめであつたか？　俺がピアノに坐つておる時俺は彼女に結婚を申込んだのでないか？　俺等は温和で思ひやりがあると豫期されて居た。！　思ひやり！　處が突然、流行がかわつて、彼等は俺達に殺人者になるやう求めた。解つたか！　人殺



し！』

こんどは低い調子で悲しげに話し續ける。

『俺の女房も勿論流行を追ふて居た。一滴の涙も流さない！　俺はあれが泣き出すのを、汽車を下りて來て下さいと云ひ出すのを、他の人々と一緒に行かないやうにと願ひ出すのを、――自分の爲めに臆病者となつて呉れと云ひ出すのを待つて居た。が彼等の中勇氣あつてそれを云ふものがなかつた。彼等は皆流行を追はうとした。俺の女房も亦！　俺のも亦！　彼女は他の人々と同じようにハンカチーフを打ち振つた。』

彼のひきつつた兩腕は藻掻きながら上の方に伸びる、丁度夫に向つて證據を求めるかのやうに。

『汝は何が一番恐ろしいことであつたかを知らんと欲しておる？　迷から醒めることが一番恐ろしいことだ――出陣だ。戰爭ではない。戰爭は無ければならないもので

ある。戰爭は恐ろしいものだと解ることが恐ろしかつたか？　一番恐ろしいことは出陣だ。女が殘酷なものであることを知つた—それも恐ろしいことであつた。女等が笑つたり微薔を投げることが出來ること。彼等が自分の夫、自分の子供、數千度も寢床に寢かせ、愛撫し、自分の血と肉とで造つた小さい子供をも捨てることの出來ること。これ等は皆驚くべきことであつた。彼等は吾等を捨てた吾等を送り出した—實際送り出した。彼等は皆勇士と一緒でなしに立つことを恥ぢて居たから、それが大なる幻滅であつた……もし彼等が吾々を送り出さなかつたならば吾等は行つたと思ふか？……さう思ふか？……もし女が吾々を汽車の中に箱詰にせしめなかつたならば、もし女が、男が人殺しになるなら再び會はないと云つたならば一人の將軍でも何事もすることが出來なかつたであらう。もし女共が、他人の腦天を打ち割り同胞を擊ち殺し又は刺し殺した者には身を任せないと誓つたならば行く男は一人もないだらう。一人だつて行くものはないだらうと云ふんだ。俺は女共がん



な風にすることができるとは信じたくなかつた。彼等はその風をして居るばかりだ。彼等は自制しておるのだ。が汽笛がなると女共は泣叫び始めるだらう、そして吾々を汽車から引きずり下して吾々を救つて呉れるだらう」と思つて居た。あの時丈彼等は吾々を保護して呉れる機會にあつた。が彼等の姿頭を離れなかつたのは流行を追ふことばかり！」

彼は倒れて椅子の上に崩れ込んだ。彼は泣き初めた。彼の周圍に小人數で人垣ができた。醫者は靜に云つた。

『中尉、おいでなさい。おいでなさい。床へはいりませう。女はそんなものですよね！　だがどうも致方がない。』

病人は憤つて立ち上つた。

『女はそんなものだ？　女はそんなものだ？　何時から？　何時から？　君は婦人參政權運動者が參政權を得る爲めに大臣達の耳を平手で打つたこと、博物館に放火

したこと、街燈柱に自分の驅を縛りつけたことを聞かないか？　參政權を得る爲めに、君は聞かないか？　がその夫の爲めには？　何もしない！』

彼は氣息もつまるような絶望に壓せられたので休んで息をついた。それから又狩り出された野獸のように、しやくり泣きしながら呼び出した。

『君達は一人でも女が夫を救ふ爲めに汽車の進んで來る鐵道線路に飛び込んだことを聞いたか？　唯の一人でも女が吾等の爲めに政治家の顏を打ち又は鐵道線路に身を縛したものがあつたか？　かくの如き無鐵砲なことから救ひ出された女は一人もなかつた。全世界を通じて一人でも吾等の爲めに指一本動かしたものがなかつた。彼等は吾々を驅り出した。吾々に猿轡をはめた。彼等は吾々に、哀れなヂルのやうに拍車をあてた。彼等は吾々を人殺しをする爲めに送り出した。死ぬる爲めに送り出した—只彼等の虛榮の爲めに、君達はそれを防がうとしないのか？　否！　彼等は引きずり出さねばならぬ。雜草のやうに、根本から引き裂かねばならぬ！。君達



は丁度ヂルにしたやうに一度に四人がゝりで引張らねばならぬ。君達四人皆かゝれば彼女を引き上げられるだらう。君は醫者か！　それ！　それを俺の頭にしろ！俺は女房は要らない！　引け！彼女を引張り出せ！』

彼は自分の拳で頭を打つた。彼はあらん限りの聲で吼えながら家の中へ引き込まれた。やがて庭には人が全く居なくなつた、漸々と燈火が消えて行き、音靜まり、只遠くの方に大砲の光が見えるばかり。かの狂人を病院につれ込む手助をした巡邏兵が老いた伍長と共に頭を垂れて又出て來た。遠くの方に爆發の閃光が見え續いて殷々たる音が聞へて來る。老兵は立ちどまつて耳をすまし、拳を振り、癪にさわつた風に唾をはき、そして、つぶやく。

『ウー　地獄』

私は長々しくこの話を抄錄した。それは著者の鼓動する、身振ひする、激情せる文體を知らしめようと思つたからである。それは實に小說と云はんよりは一篇の戲